東方學報 京都第 95 册（2020）：580-524 頁

シャカの入滅年について

―― シャカムニとアショーカ王とカニシュカ王に關する歷史情報の相關分析 ――

外 村 中

は じ め に

近年の最も有力な説によれば，〈シャカムニ（以下「シャカ」）の入滅年〉は共通暦紀元前 384 年頃（數え年による算定であれば前 383 年頃）で[1]，〈アショーカ王の卽位年〉は前 268 年頃で[2]，〈カニシュカ王の卽位年〉は後 127 年頃とされる[3]。なお，このシャカの入滅年はいわゆる北傳によるものである。一方，唐の玄奘（600/602-664）が殘した傳え（以下「玄奘の傳え」）によれば，カニシュカ王はシャカの入滅後第 6 世紀に入る少し前に在位し佛典の結集をおこなったらしい（後述 2-4.）。近年の研究においては注意が拂われていないようであるが[4]，もしこの玄奘の傳えが正しければ，次のように考えられるので，近年

1） その説の主張者である中村元氏は，記錄が數え年によるものと判斷し「前 383 年頃」とする。したがって，嚴密には「前 383 年頃」を優先させて表記すべきではあろうが，筆者は，諸佛典に記されたシャカ入滅後の年次の算定は基本的には經年（經過年）によるものであろうと考えるし，他の多くの研究者による算定も經年をもっておこなわれているので，分析をスムースにおこなうために，小稿ではとりあえず經年をもって議論する。中村元「マウリヤ王朝ならびにゴータマ・ブッダの年代について」（『インド史 II』中村元選集［決定版］第 6 卷，春秋社，1997 年），581-619 頁。中村元［ほか］編『岩波佛教辭典』第 2 版（岩波書店，2002 年），釋迦，458 頁。なお，中村氏の説は次の宇井伯壽氏の説を修正補强したものである。宇井伯壽「佛滅年代論」（『印度哲學研究第二』，岩波書店，1965 年），3-111 頁，59-60 頁。

2） 中村元，1997 年，596 頁。

3） HarryFalk : 2001 ; 2007 ; 2015（後述 2-3.）。なお，同氏によれば，正確には後 127 年頃とはカニシュカ王が正式な卽位式をあげる前にクシャーナ紀元を始めた年で，實際の卽位は後 129 年頃らしいが，小稿における議論においては大きな違いはないので，とりあえず後 127 年頃を卽位年として扱い，嚴密なところは後考にゆだねたい。

4） たとえば，高田修氏は「佛教所傳のカニシュカ出世年代は，…玄奘のいうところこの程度だとすれば，他は推して知るべきである。…少なくともカニシュカの年代に關する限り，佛教の所傳に重きを置くことはできない。」とさえいう。高田修『佛像の起源』（岩波書店，↗

の最も有力な説にはどこかに問題があることになってしまう。

すなわち，シャカの入滅年が前 384 年頃であれば，シャカの入滅後第 6 世紀入りは後 117 年頃となり（表 1），カニシュカ王はそれよりも前に即位していたはずであるから，即位年が後 127 年頃では遅すぎることになってしまうのである。

筆者は思うに，シャカの入滅年の算定に問題がありそうである。前 384 年頃ではなく，前 368 年頃（あるいはそれよりも少し後）と見るべきであろう[5]。けれどもそういえば，いわゆる南傳による説はシャカの入滅年を前 486 年頃と見るので[6]，筆者の解釋は，北傳の支持者のみならず南傳の支持者からも直ちには贊意は得られないであろう[7]。しかしながら，南傳の內容も實のところは前 368 年頃であったことをしめすものであるように，筆者には思われてならない。そこで，小稿では，〈シャカの入滅年〉と〈アショーカ王の即位年〉および〈カニシュカ王の即位年〉に關する情報を相關分析しながら初歩的な考察をおこない，以上のように考える理由を整理する。

なお，北傳の內容に關しては，拙譯をしめすが，一方，南傳の內容については，根本文獻である『島史』（共通曆紀元後第 4 世紀はじめから第 5 世紀前半に成立）およびそれを補足する『大史』（後第 5 世紀半ばに成立）には基準譯があるので，それらをできる限りそのまま引用する。すなわち『島史』は平松友嗣氏の譯，『大史』は立花俊道氏の譯を用いるこ

1967 年），167–168 頁。しかしながら，筆者は思うに，そのようにはいえないであろう。というのは，筆者は小稿でこれから議論するところのように考えるからである。一方，玄奘の傳えに注目すべきことは，すでに宇井氏に示唆がある。同氏の言を我々は無視してしまってはならないであろう。宇井伯壽，1965 年，107–108 頁。同「阿育王刻文」（『印度哲學研究第四』，岩波書店，1990 年），245–337 頁，334 頁。

5） シャカの入滅年〈前 368 年〉説は，必ずしも（とくに日本では）注目されてはいないようであるが，すでに Pierre H. L. Eggermont 氏によって説かれているところである。同氏の結論についてはまさにそのとおりであろう。ただし，その結論を導くに至った過程には不明な點が多いようにも思われるので，筆者は同氏の手法は參考にせず獨自の手法をもって分析するが，同じ結論に到達する。同氏の分析に關しては Siglinde Dietz 氏による詳しい解説もあるし，紙幅の浪費を避けるためにも，小稿ではいちいち同氏の説についての檢證はおこなわず，もっぱら筆者自らの分析の過程をしめすことにする。Siglinde Dietz : ‘The Dating of the Historical Buddha in the History of Western Scholarship up to 1980’. in : Heinz Bechert（ed.）*When did the Buddha live? : the controversy on the dating of the historical Buddha : selected papers based on a symposium held under the auspices of the Academy of Sciences in Göttingen.* Delhi, India : Sri Satguru Publications, 1995, pp. 39–105, pp. 97–104,（p. 101, p. 103）.

6） たとえば，山崎元一氏は南傳をとる。山崎元一「佛滅年代シンポジウムに參加して」（『東方學』第 77 輯，1989 年），167–176 頁。

7） シャカの入滅年についての諸説に關しては，たとえば次も參考になろう。Heinz Bechert : ‘Introductory Essay : The Dates of the Historical Budda – a Controversial Issue’. in : Heinz Bechert（ed.）*op. cit.*, 1995, pp. 11–36, pp. 29–30.

とにする[8]。ただし，理解を助けるためにアルファベット表記などを筆者が補足するところもある。また，〈アショーカ王の即位年〉については，前 268 年頃とする説が現在のところ最も有効であり[9]，さらなる考察は現在のところ困難なように思われるので，小稿ではその説にそのままにしたがい議論をおこなうことにする。

それから，小稿においては，情報の分析と檢證のために多くの表を繰り返し用いざるを得ない。繁雑になってはしまうが，ご了承いただきたい。

第 1 章，シャカの入滅日

1-1. 入滅日は 2 月末日か 8 月 22 日か

シャカの入滅年をより正確に算定するために必要となってくるので，先ずは〈シャカの入滅日〉から檢討する。この點に關しては，インド暦で 2 月末日（正確には〈吠舍佉月の後半十五日すなわち白分十五日〉したがって滿月の日）あるいは 8 月 22 日（正確には〈迦剌底迦月の後半八日すなわち白分八日〉したがって半月の日）とする説があることを本節で確認し，次節（1-2.）では二者擇一するのであれば，8 月 22 日をとるべきであろうことを述べる[10]。

なお，小稿では，考察の便を圖るために，インド暦の各月はとりあえず唐の玄奘の『大唐西域記』（卷 2）の內容にもとづき，制呾羅月 Chaitra は 1 月，吠舍佉月 Vaiśākha は 2 月，逝瑟吒月（あるいは逝瑟咤月）Jyeṣṭha は 3 月，頞沙荼月（あるいは額沙荼月）Āṣāḍha は 4 月，室羅伐拏月 Śrāvaṇa は 5 月，婆達羅鉢陀月 Bhādrapada は 6 月，頞濕縛庾闍月 Aśvayuja は 7 月，迦剌底迦月（あるいは羯栗底迦月）Kārttika は 8 月，末伽始羅月 Mārgaśīra は 9 月，報沙月 Pauṣa は 10 月，磨祛月 Māgha は 11 月，頗勒窶拏月 Phālguna は 12 月と見ておく[11]。また，月日の算定も，閏月などは考えず，とりあえず單純計算をもっておこなっておくので，嚴密なところは後考にゆだねたい。

(1-1-1.)『大唐西域記』によれば，シャカの入滅日については，インド暦で 2 月末日（唐

8） 平松友嗣（譯）『島王統史』南傳大藏經第 60 卷（大藏出版株式會社，1939 年）。立花俊道（譯）『大王統史』南傳大藏經第 60 卷（大藏出版株式會社，1939 年）。なお，歐文基準譯としては，次を參照する。Hermann Oldenberg（ed. & trans.）: *The Dīpavaṃsa : an ancient Buddhist historical record*. London : Williams and Norgate, 1879. Wilhelm Geiger（trans.）: *The Mahāvaṃsa, or, the great chronicle of Ceylon*. London : Published for the Pali Text Society by Oxford University Press, 1912.

9） 中村元，1997 年，596 頁。

10） この點は，いわゆる涅槃圖を考察する上でも重要になってこよう。

11） 『大唐西域記』については，次を參照。水谷眞成（譯）『大唐西域記』中國古典文學大系第 22 卷（平凡社，1971 年）。

暦で3月15日）あるいはインド暦で8月22日（唐暦で9月8日）の二つの説があるとされる。ただし，有効な（あるいは有力な）情報を見出せなかったためか，『大唐西域記』にはどちらが正しいかに關しては説明がない。

◇『大唐西域記』（巻6）「先の世の多くの文獻によれば，佛は壽命八十歳で，インド暦で2月の後半15日（したがって2月末日）に般涅槃に入ったといわれる。すなわちこれは（唐暦で）3月15日に當たる。（一方）説一切有部は，（入滅日は）インド暦で8月の後半8日（したがって後述（1-1-2.）によれば8月22日）とする。これはすなわち（唐暦で）9月8日に當たる。[12]」

（1-1-2.）インド暦についての基本情報としては，たとえば『大唐西域記』に記された次が參考になろう。それによれば，インド暦では，月の始めに月が缺け始め，月の終わりに滿月になるという。これは，インド暦の1月1日は唐暦の1月16日に當たり，インド暦は唐暦と日付の表記の上では15日のズレがあることを意味する。また，インド暦では月の前半（黑分）は14日の場合もあれば15日の場合もあるという。したがって，一ヶ月が30日の大の月と一ヶ月が29日の小の月があることになる。

◇『大唐西域記』（巻2）「月が滿ち始めてから滿月になるまでを白分という。月が缺け始めてから完全に見えなくなるまでを黑分という。黑分（の日數は）はあるいは十四日あるいは十五日ある。月に小と大があるからである。黑分が先にあり，白分が後にあり，合わせて一ヶ月をなす。[13]」

そして，説一切有部の律書である『十誦律』によれば，奇數月は大の月で，偶數月は小の月とされる。

◇『十誦律』（巻48）「春の初月（すなわち1月）は大（の月）で，二月は小，三月は大，四月は小（の月）である。夏の初月（すなわち5月）は大（の月）で，二月は小，三月は大，四月（すなわち8月）は小（の月）である。冬の初月（すなわち9月）は大（の月）で，二月は小，三月は大，四月（すなわち12月）は小（の月）である。[14]」

したがって，2月は小の月であるから「2月の後半15日〈吠舍佉月の後半十五日〉」は2月29日（小稿では2月末日と表記する）で，8月は小の月であるから「8月の後半8日

12）『大唐西域記』（巻6）T51,903b「聞諸先記曰。佛以生年八十。吠舍佉月。後半十五日。入般涅槃。當此三月十五日也。說一切有部。則佛以迦剌底迦月。後半八日。入般涅槃。此當九月八日也。」

13）『大唐西域記』（巻2）T51,875c「月盈至滿。謂之白分。月虧至晦。謂之黑分。黑分或十四日，十五日。月有小大故也。黑前白後。合爲一月。」

14）『十誦律』（巻48）T23,346b「春初月大二月小。三月大四月小。夏初月大二月小。三月大四月小。冬初月大二月小。三月大四月小。」一年を三つの季節に分けることがあったことは，後述（1-2-4-1-③.）するところを參照。

〈迦剌底迦月の後半八日〉」は8月22日ということになる。

(1-1-3.) 以上により，シャカの入滅日は，多くの文獻ではインド暦で2月末日とされるが，北傳に屬する說一切有部の說ではインド暦で8月22日とされることがしられる[15]。一方，南傳は，多くの關連情報を傳えつつ前者に同じくその日はインド暦で2月末日とし，たとえば次のようにいう。

◇『大史』III. 2.「拘尸那羅 Kusinārā なる雙生せる沙羅樹の間の優れてよき［所］に於て，吠舍佉月，滿月の日に，世の彼の燈明（釋尊）は涅槃に入りたまへり。」

◇『大唐西域記』（卷2）「春の三ヶ月とは，制呾羅月と吠舍佉月と逝瑟吒月のことをいう。すなわちこれは（唐暦で）1月16日から4月15日までに當たる。[16]」

(1-1-4.) また，次も同樣に2月末日であったらしいことをしめす。『島史』にいう「第二の雨期に達せし時」とは『大唐西域記』によればインド暦で6月1日のことであろう。そうであれば，『島史』は，シャカの入滅日（2月末日）の翌日である入滅後〈第1月第1日〉はインド暦で〈3月1日〉で，それから三ヶ月が經過した〈第4月第1日〉はインド暦で〈6月1日〉で，その日に第一結集が開會されたと述べていると解釋することもできよう[17]。ただし，あるいはそこまでは嚴密なものではないかもしれない[18]。

◇『島史』V. 4-5.「佛陀の［入涅槃後］三月を過ぎたる第四月第二の雨期に達せし時，法の結集を行へり。この第一結集は，摩揭陀 Magadha の耆梨跋提 Giribbaja（王舍城 Rājagaha）の七葉 Sattapaṇṇa 窟の入口に於て七ヶ月にして終了せり。」

◇『大唐西域記』（卷2）「昔からインドの僧侶は，佛の敎えにしたがい雨安居（雨期の修行）をおこなう。（その期間は）あるいは前の三ヶ月あるいは後の三ヶ月という。前の三ヶ月はすなわち（唐暦で）5月16日から8月15日まで，後の三ヶ月はすなわち（唐暦で）6月16日から9月15日に當たる。[19]」

---

15) シャカの入滅日は8月22日と說一切有部が傳えていたことは，次によっても確認される。『阿毘達磨大毘婆沙論』（卷191）T27,957b「謂。佛於迦栗底迦月。白半八日。中夜而般涅槃。」

16) 『大唐西域記』（卷2）T51,876a「春三月謂。制呾羅月，吠舍佉月，逝瑟吒月。當此從正月十六日。至四月十五日。」

17) あるいは Fleet 氏のように，2月末日 the full-moon day of the month Vaiśākha を第1月第1日と見ることもできるかもしれない。Fleet, 1909, p. 2.

18) なお，以上によれば，第一結集の開會日はインド暦で〈6月1日〉のようにも思われるが，大乘の傳えによれば，そうではなかったらしい。というのは，『大智度論』（卷2）T25,68a「是中夏安居三月。初十五日說戒時。集和合僧。」とあるからである。また，後述するように有部の傳えによれば，入滅日は8月22日である。そうであれば，有部は第一結集の開會日についてさらに異なる傳えをもっていたことになろう。したがって，第一結集の開會日の正確なところについてはよくわからない。後考にゆだねたい。

19) 『大唐西域記』（卷2）T51,876a「故印度僧徒。依佛聖敎。坐兩（あるいは雨か）安居。或↗

(1-1-5.) 以上を參考にすれば，次の南傳にいう「四ヶ月にして」は「第4月目に」という意味であるから，南傳における月次については數えによる表記のようでもある。一方，南傳におけるシャカの入滅後年次の表記は，數えではなく經年によるものらしい（後述1-2-2-3. および3-5.）。

◇『島史』I. 24.「般涅槃後四ヶ月にして，最初の結集あるべし。」

1-2. 入滅日は8月22日（以下では月日の表記は原則としてインド暦による）

1-2-1. Fleet氏説

以上のようにシャカの入滅日については二つの説があるが，南傳の〈2月末日〉説に對して早くに疑問を提示し，玄奘が傳える説一切有部の〈8月22日〉説をとるべきことを主張したのが，J. F. Fleet氏である[20]。筆者は思うに，同氏の説の結論に關してはそのとおりであろう。ただし，その議論の過程には補説が必要なようである。そこで檢證補説をおこなうに，同氏が説くところは以下のようにまとめられよう。なお，正確なところは，同氏の論考を直接に參照していただきたい。

先ず同氏が疑問とするのは，南傳においては，先述（1-1-3.）したシャカの入滅日のみならず，シャカの生誕日も成道日も2月末日（「吠舍佉月，滿月の日」）とされる點である(p. 8)。確認するに次のとおりである。確かに不自然である。

◇『島史』XXI. 28.「吠舍佉月，滿月の日に，正覺者は生まれ給ひしが，…」

◇『大史』I. 12.「彼の大牟尼は摩竭陀國 Magadha，優樓頻羅［村］Uruvelā なる菩提樹の下に［座して］，吠舍佉月，滿月の日に無上菩提に達したまへり。」

そして，同氏は，様々な資料を紹介しながら，次の『島史』および『大史』の內容にもとづき，アショーカ王の在位第18年「六ヶ月の時」に當たる「末伽始羅月の新月昇る日」（筆者は思うに，先述（1-1-2.）したところによれば，9月は大の月であるから9月16日[21]）に，スリランカのデーヴァーナンピヤ王は第一回目の卽位式をおこなったと解釋した（p. 11）。そして，それから逆算して，アショーカ王は逝瑟吒月の新月昇る日（したがって3月16日）の少し後で，當時吉日とされていた月が報沙の星宿にかかる日に卽位したと判斷

↘ 前三月。或後三月。前三月當此。從五月十六日。至八月十五日。後三月當此。從六月十六日。至九月十五日。」

20) J. F. Fleet : 'The Day on Which Buddha Died.' in : *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1909, pp. 1-34, pp. 13-15, pp. 21-22. なお，同氏は正確には「Kārttika śukla 8」と表記する（p. 14）。

21) Fleet氏によれば，「新月昇る日」は白分初日したがって16日ということになるが（p. 11），黑分末日したがって15日の可能性もあるかもしれない。

し，アショーカ王の卽位日は逝瑟吒月の白分5日（したがって3月20日）とした上で，その日は現行暦で4月25日に當たる日であろうとした（p. 11, p. 27, p. 31）。

◇『島史』XI. 14.「彼［阿育王 Asoka］の十七年と翌年の六ヶ月の時の冬期の第二月，最上の額沙荼の星宿の下に，天愛帝須王 Devānampiya-Tissa はタンバパンニ Tambapaṇṇi に於て灌頂せり。」

◇『大史』XI. 40-41.「…末伽始羅月の新月昇る日に，已に卽位式を行ひたる，楞伽［人］の利益安樂を喜べる楞伽王のために，…。」

◇『大唐西域記』（卷2）「秋の三ヶ月とは，頞濕縛庾闍月，迦剌底迦月，末伽始羅月のことをいう。すなわちこれは（唐暦で）7月16日から10月15日までに當たる。[22]」

そして，同氏は，アショーカ王の卽位日と，マヒンダが上座部佛教を傳えるためにスリランカに來島した日と，シャカの入滅日に關する情報を相關分析することにより，シャカの入滅日が2月末日であれば情報間に齟齬が生じることを指摘し，一方，8月22日ならば問題はないことを論述し，シャカの入滅日は8月22日（正確には〈迦剌底迦月の後半八日すなわち白分八日〉）と算定した（p. 22）。

筆者は思うに，シャカの入滅日について同氏が導いた結論はそのとおりであろう。しかしながら，アショーカ王の卽位日に關しても含めて，同氏の解釋の過程には直ちにはしたがえない。というのは，同氏は『島史』がしめす他の大きな可能性を無視してしまっているようにも思われるからである。そこで以下では補說として他の可能性をしめす『島史』の內容をもあわせて筆者獨自の手法をもって再分析をこころみる。結果的には，アショーカ王の卽位日を確定することは現在のところ困難なように思われるが，シャカの入滅日は同氏が主張するとおり8月22日と見てよさそうである。

1-2-2. アショーカ王の卽位年と第三結集の閉會年

シャカの入滅日を算定する上で必要となってくるので，ここでは〈アショーカ王の卽位年〉といわゆる〈第三結集の閉會年〉を確認する。兩者に關する情報を相關分析することにより，南傳においては，〈アショーカ王の卽位年（正確には卽位の時點）〉は〈シャカの入滅後218年目〉ではなく〈シャカの入滅後218年が經過した219年目〉であり（表2），〈第三結集の閉會年（正確には閉會された時點）〉は〈アショーカ王の在位第17年目〉でかつ〈シャカの入滅後236年目〉とされていることを明らかにする。

(1-2-2-1.）先ず次の南傳によれば，アショーカ王の卽位の時點は，シャカの〈入滅後218年目〉あるいは〈入滅後218年が經過した219年目〉のいずれかであろう。二つの可

22）『大唐西域記』（卷2）T51,876a「秋三月謂。頞濕縛庾闍月，迦剌底迦月，末伽始羅月。當此從七月十六日。至十月十五日。」

能性が考えられるのは，數えによる表記であるのか經年による表記であるのかよくわからないからである。なお，「灌頂せり」とは，卽位式をもって正式に卽位したことをいう。

◇『島史』VI. 1.「正覺者の般涅槃後二百十八年に喜見 Piyadassana[=Asoka]は灌頂せり。」

◇『大史』V. 18-21.「頻頭沙羅 Bindusāra の兒は百一人なりとして知られしが，その中にて阿育 Asoka［王子］は善根・威光・體力・神通力を有ち，異母の兄弟九十九人を殺戮して全閻浮洲に唯一の王位に卽きたり。勝者の涅槃の後，こ［の王］の卽位の前，二百十八［年］なりと，是の如く知るべきなり。」

(1-2-2-2.）また次の南傳によれば，アショーカ王の在位第 17 年目に第三結集が閉會された時點は，シャカの〈入滅後 236 年目〉あるいは〈入滅後 236 年が經過した 237 年目〉ということになろう。

◇『島史』VII. 37-59.「［佛滅後］二百三十六年に達せし時，彼等六萬の比丘等は，阿育園 Asokārāma に住したりき。邪命士，その他種々の異敎徒等は，敎［法］を傷へり。［彼等は］全て黃衣を纏ひて，勝者の敎［法］を傷へり。六通を具し大神通力のある群の上首なる目犍連子 Moggaliputta は，千比丘に圍繞せられて法の結集を行へり。異說の破斥者なる大慧目犍連子は，上座說を確固たらしめて第三結集を行へり。…弟子の摩哂陀 Mahinda は彼の親敎師目犍連子の許に於て正法を學べり。…［佛滅後］第二百三十六年を過ぎて再び上座部に大分裂生ぜり。佛陀の敎［法］を信ずる刹帝利大王法阿育 Dhammāsoka は，巴連弗城 Pāṭaliputta に於て統治せり。…この第三結集は，法王の建立せし阿育園精舍に於て行はれ，九ヶ月にして終了せり，と。」

◇『大史』V. 281.「斯くて一千人の比丘により，阿育王の保護によりて，この正法會誦は九ヶ月にして終りたり。王の［卽位］第十七年，彼仙士は年七十二歲，大自恣の日に會誦を終りたり。」

(1-2-2-3.）さて以上の南傳がしめすところを相關分析するに，〈アショーカ王の卽位の時點〉および〈アショーカ王の在位第 17 年目に第三結集が閉會された時點〉についての內容がともに成立するのは，〈アショーカ王の卽位の時點がシャカの入滅後 218 年が經過した 219 年目〉でかつ〈アショーカ王の卽位後 17 年目に第三結集が閉會された時點がシャカの入滅後 236 年目〉に當たる〈表 2 の「アショーカ王卽位後年次」と「南傳・シャカ入滅後年次」〉にしめすような組み合わせしかないであろう。なお，この點は，以上の『島史』VI. 1.に見られる「般涅槃後二百十八年」の表記が經年によるものであることをしめすものといえよう。また以上の『島史』VII. 37-59. に「［佛滅後］第二百三十六年を過ぎて再び上座部に大分裂生ぜり」というのは，第三結集の後（すなわちシャカの入滅後 237 年目）のことになろう。あとはそれぞれの年次を一年ずつ對應させていけば，南傳によるシャカの入滅後年次とアショーカ王の卽位後年次とのかなり正確な對應關係がし

られよう。なお，表 2 では，卽位の時點をとりあえず 219 年目の眞ん中に置いているが，正確なところは後考による調整を待ちたい。ついでながら，次によれば，アショーカ王の在位年數（統治年數）は合計 37 年間とされる。

◇『島史』V. 101.「賓頭沙羅の子にして大名聲ある刹帝利法阿育も亦三十七年統治せり。」

1-2-3. マヒンダの來島年

同じくシャカの入滅日を算定する上で必要となってくるので，ここではマヒンダのスリランカ來島年を確認する。次によれば，その年は〈アショーカ王の在位第 18 年が經過した第 19 年目〉でかつ〈シャカの入滅後 236 年が經過した 237 年目〉となろう（表 2）。

◇『島史』XII. 41-44.「阿育 Asoka の灌頂より十八年を經て，帝須 Tissa の灌頂後滿七ヶ月，摩哂陀は［法藹］十二年にして，閻浮洲よりこゝに來到せり。夏の最終の月，逝瑟吒月の布薩のアヌラーダ Anurādhā とヂェッタ Jeṭṭha の星宿の下に，衆の上首摩哂陀は眉沙迦山 Missaka に來れり。」

◇『島史』XV. 71-73.「［佛陀はその時］「二百三十六年を過ぎて名を摩哂陀といへる［長老が］敎［法］を［楞伽 Laṅkādīpa に］輝かすべし。…［と懸記し給へり］。」

1-2-4. アショーカ王の卽位月とデーヴァーナンピヤ王の卽位月とマヒンダの來島月

同じくシャカの入滅日を算定する上で必要となってくるので，ここでは〈アショーカ王の卽位月〉と〈デーヴァーナンピヤ王の卽位月〉と〈マヒンダの來島月〉について確認する。次によれば，アショーカ王の在位第 18 年〈第 6 月目〉あるいは〈第 6 月が經過した第 7 月目〉にスリランカのデーヴァーナンピヤ王は卽位（第一回目）をし，その後〈第 7 月目〉あるいは〈第 7 月が經過した第 8 月目〉にマヒンダがスリランカに來島したようである。また，三者の相關については，大きく分ければ表 3 のような四つの可能性が考えられそうである。繁雜になってはしまうが，檢證のために必要となるから，表の確認をお願いしたい。

◇『島史』XI. 14.「彼［阿育王 Asoka］の十七年と翌年の六ヶ月の時の冬期の第二月，最上の額沙荼の星宿の下に，天愛帝須王 Devānampiya-Tissa はタンバパンニ Tambapaṇṇi に於て灌頂せり。」

◇『島史』XII. 41-43.「阿育 Asoka の灌頂より十八年を經て，帝須 Tissa の灌頂後滿七ヶ月，摩哂陀 Mahinda は［法藹］十二年にして，閻浮洲よりこゝに來到せり。」

以上の『島史』XI. 14. にいう「六ヶ月の時」を，Fleet 氏は「第 6 月目」と解釋するが（p. 11, p. 15），一方，Hermann Oldenberg 氏は「第 6 月が經過した第 7 月目」とする[23]。

23） Oldenberg : *The Dīpavaṃsa* XI. 14. : When seventeen years of that king（that is, Asoka）and six months of the next year had elapsed, in the second month of the winter season, under↗

この點については，どちらをとるべきか筆者には判定できないので，とりあえずどちらも有效と見ておくことにする。また，以上の『島史』XII. 41-43. によれば，帝須 Tissa（すなわちデーヴァーナンピヤ王）の卽位後「滿七ヶ月」（すなわち第７月が經過した第８月目）にマヒンダは來島したとされるが，後述（1-2-4-2-②.）するように『大史』はそれが〈第７月目〉であったことをしめす。この點についても，どちらをとるべきか筆者には判定できないので，とりあえずどちらも有效と見ておくことにする。

以下では結局のところ，四つの可能性のうちいずれをとるべきか結論を出すことはできない。ただし，いずれも史實ではないと完全に否定してしまうこともできない。以下ではそうであることを確認するだけとなるので，後におこなう檢討のために，とりあえず四つの可能性のうちのいずれかが正しいと想定することが許されれば，以下は省略し，次（1-2-5.）に進まれてもかまわない。

（1-2-4-1.）先ず表３にしめすマヒンダの來島月に關する情報を分析する。

①　表３可能性１，曆月名に關する情報からしられる３月。次の『島史』の內容によれば，マヒンダは３月（逝瑟吒月）の布薩（という行事がおこなわれた日）に來島したとされる。なお，次が意味するところは，逝瑟吒 Jeṭṭha の星宿に滿月がかかる月で，アヌラーダ Anurādhā とヂェッタ Jeṭṭha の星宿にその日の月がかかる時に來島したということであろうから，月と星宿の位置關係から判斷するに[24]，〈マヒンダの來島は３月末日頃〉と見てよいであろう。また，布薩は，毎月の滿月と新月の日におこなわれたとされる[25]。

◇『島史』XII. 41-44.「阿育 Asoka の灌頂より十八年を經て，帝須 Tissa の灌頂後滿七ヶ月，摩哂陀は［法藹］十二年にして，閻浮洲よりこゝに來到せり。夏の最終の月，逝瑟吒月の布薩のアヌラーダ Anurādhā とヂェッタ Jeṭṭha の星宿の下に，衆の上首摩哂陀は眉沙迦山 Missaka に來れり。」

◇『島史』XI. 39-40.「彼等は天愛帝須の第二の卽位灌頂を行へり。第二の卽位灌頂は吠舍佉月の布薩に行はれたり。それより一ヶ月を經たる逝瑟咤月の布薩に，摩哂陀を第七と

↘ the most auspicious Nakkhatta of Asâḷhâ, Devânampiya was installed in the kingdom of Tambapaṇṇi.

24）星宿と曆については，次を參照。小野淸「二十八宿と獸帶との想定及び相傳に就て」（『天文月報』第 10 卷第 6 號，1917 年），28-31 頁。Benjamin Walker : *Hindu world : An encyclopedic survey of Hinduism v. 1.* New Delhi : Munshiram Manoharlal, 1983, pp. 195-198, CALENDAR.

25）總合佛敎大辭典編集委員會（編）『總合佛敎大辭典』（法藏館，2005 年），1213-1214 頁，布薩。

する［人々は］閻浮洲よりこゝに來れり。」

② 表3可能性2，暦月名に關する情報からしられる3月。次の『大史』の內容によっても，マヒンダは3月末日頃に來島したとされる。なお，①で考察したとおり『島史』には〈マヒンダの來島は3月末日頃〉らしいことをしめす內容が見られる。『大史』の關連箇所にはその『島史』の內容と齟齬をきたす內容は見られないので，『大史』は『島史』と同樣な文脈をもって記されていると理解しておいてよいであろう。

◇『大史』XII. 42.「その名に天愛の語を冠し，…彼人王は，斯くて吠舍佉月滿月の日，楞伽［島］Laṅkā に於て盛なる祭の行はるゝ時，自ら王位に上りたり。」

◇『大史』XIII. 14.「(長老はその所に座して斯の如く思惟せり)「…逝瑟吒月の布薩會の日に眉沙迦山 Missaka に登るべし，吾等はその日に勝れたる楞伽島に渡らん」と。」

◇『大史』XIII. 18-20.「長老は其處に住まること一箇月にして，逝瑟吒月の布薩會の日に，四人の長老，須末那 Sumana，それよりかの在家人たるバンドゥカ Bhaṇḍuka は，親族たるの故を以て伴ひ，かれ大神力者はその精舍より空中に昇りて，一行と共にこの快き眉沙迦山に降り，優れたるシール Sīla 峯にて美はしきアンバッタラ Ambatthala に立てり。」

③ 表3可能性3，季節に關する情報から推定される4月（夏の最終の月）。一方，①の『島史』XII. 41-44. の內容には「夏の最終の月」とあるので，あるいは4月に當たる月にマヒンダは來島したようでもある。次によれば，「夏の最終の月」とは4月を指すとも解釋される。ただし，4月をとる場合，後述（1-2-4-2-③.）するようにデーヴァーナンピヤ王の卽位月は8月あるいは9月となり（表4，4-3），デーヴァーナンピヤ王は「冬の第二月」に卽位したとする『島史』XI. 14. の內容と齟齬をきたす。したがって，4月ではないようにも思われる。しかしながら，情報の性格上，4月ではないと斷定することもできないように思われるから，とりあえずそのまま有效と見ておくことにする。

◇『大唐西域記』（卷2）「また一年を六つの季節に分ける。…（唐暦で）3月16日から5月15日（したがってインド暦で3月1日から4月末日）までは盛熱（すなわち夏に相當する季節）である。[26]」

◇『大唐西域記』（卷2）「佛の敎え（如來聖敎）では，一年を三つの季節に分ける。（唐暦で）1月16日から5月15日（したがって，インド暦で1月1日から4月末日）までは熱時（すなわち夏に相當する季節）である。5月16日から9月15日までは雨時である。9月16日から1月15日までは寒時（すなわち冬に相當する季節）である。[27]」

26）『大唐西域記』（卷2）T51,875c-876a「又分一歲。以爲六時。…三月十六日至五月十五日。盛熱也。」

27）『大唐西域記』（卷2）T51,876a「如來聖敎。歲爲三時。正月十六日至五月十五日。熱時也。↗

④　表3可能性4，季節に關する情報から推定される6月（夏の最終の月）。また，①の『島史』XII. 41-44. にいう「夏の最終の月」は，あるいは6月を指す可能性もある。というのは，『島史』には次のように「額沙荼月（すなわち暦名の4月）」を「夏の第一月」とする內容が見られるからである。

◇『島史』XIV. 76.「額沙荼月の完き滿月の布薩に，ウッタラーサールハー Uttarāsāḷhā の星宿の下に，山に於て界を結び」

◇『島史』XV. 1.「［摩哂陀は王にいへり］。夏の第一月の滿月の布薩に我れらは閻浮洲より［こゝに］來りて，最勝の山に住せり。」

また，以上は次に對應するものともいえよう。

◇『大唐西域記』（卷2）「夏の三ヶ月とは，頞沙荼月と室羅伐拏月と婆羅鉢陀月のことをいう。すなわちこれは（唐暦で）4月16日から7月15日（したがってインド暦で4月1日から6月末日）までに當たる。[28]」

そうであれば，1月から3月までの三ヶ月間が「春」であり，「夏」とは4月から6月までの三ヶ月間ということになる。したがって，「夏の最終の月」は6月ということになるのである。なお，6月をとる場合，後述（1-2-4-2-④.）するようにデーヴァーナンピヤ王の卽位月は10月あるいは11月となり（表4，4-4），デーヴァーナンピヤ王は「冬の第二月」に卽位したとする『島史』XI. 14. の內容と齟齬なく相關する。しかしながら，情報の性格上，6月であると斷定することもできないであろう。筆者は思うに，基本的な情報といえる①の『島史』XII. 41-44. にいう「夏の最終の月」と「逝瑟吒月」は相異なる文脈による情報の混合ではなかろうか。いずれにせよ，どちらをとるべきか筆者には判定できないので，とりあえずどちらも有效と見ておくことにする。

（1-2-4-2.）次に表3にしめすデーヴァーナンピヤ王の卽位月に關する情報を分析する。

①　表3可能性1，暦月名に關する情報からしられる8月。次の『島史』の內容によれば，3月（逝瑟吒月）末日頃が「灌頂後滿七ヶ月」すなわち〈卽位後第7月が經過した第8月目〉に當たると解釋されるので，デーヴァーナンピヤ王は8月に卽位したことになろう。表4，4-1を參照。

◇『島史』XII. 41-44.「阿育 Asoka の灌頂より十八年を經て，帝須 Tissa の灌頂後滿七ヶ月，摩哂陀は［法藹］十二年にして，閻浮洲よりこゝに來到せり。夏の最終の月，逝瑟

↘ 五月十六日至九月十五日。雨時也。九月十六日至正月十五日。寒時也。」

28）『大唐西域記』（卷2）T51,876a「夏三月謂。頞沙荼月，室羅伐拏月，婆羅鉢陀月，當此從四月十六日。至七月十五日。」

吒月の布薩のアヌラーダ Anurādhā とヂェッタ Jeṭṭha の星宿の下に，衆の上首摩哂陀は眉沙迦山 Missaka に來れり。」

② 表 3 可能性 2，暦月名に關する情報からしられる 9 月。次の『大史』の內容によれば，デーヴァーナンピヤ王は 9 月に卽位したとされる。なお，先述（1-1-2.）したところによれば，「末伽始羅月の新月昇る日」は，9 月 16 日（あるいは 15 日）のことであろう[29]。また，『大史』は先述（1-2-4-1-②.）したように，〈マヒンダの來島は 3 月末日頃〉とする『島史』と同樣な文脈をもって記されていると解釋することも可能である。そうであれば，『大史』にいうマヒンダが來島した 3 月は，デーヴァーナンピヤ王の〈卽位後第 7 月目〉ということになろう（表 4，4-2）。

◇『大史』XI. 40-41.「…末伽始羅月の新月昇る日に，已に卽位式を行ひたる，楞伽［人］の利益安樂を喜べる楞伽王のために，…。」

③ 表 3 可能性 3，季節に關する情報から推定される 8 月あるいは 9 月。①の『島史』XII. 41-44. の內容にいう「灌頂後滿七ヶ月」すなわち〈卽位後第 7 月が經過した第 8 月目〉が先述（1-2-4-1-③.）したように，「夏の最終の月」が 4 月であれば，デーヴァーナンピヤ王は 8 月あるいは 9 月に卽位したことになる（表 4，4-3）。なお，そうであれば，「冬期の第二月」に卽位したとする次の『島史』XI. 14. の內容と矛盾しよう。8 月あるいは 9 月が「冬期の第二月」に當たることはないであろう。しかしながら，情報の性格上，8 月あるいは 9 月ではないと斷定することもできないように思われるから，とりあえずそのまま有效と見ておくことにする。

◇『島史』XI. 14.「彼［阿育王 Asoka］の十七年と翌年の六ヶ月の時の冬期の第二月，最上の額沙荼の星宿の下に，天愛帝須王 Devānampiya-Tissa はタンバパンニ Tambapaṇṇi に於て灌頂せり。」

④ 表 3 可能性 4，季節に關する情報から推定される 10 月あるいは 11 月。③の『島史』XI. 14. の內容によれば，デーヴァーナンピヤ王は「冬の第二月」に卽位したとされるが，次の『大唐西域記』の內容によれば，「冬の第二月」は 10 月とも解釋されよう。これは先述（1-2-4-1-④.）したマヒンダの來島月を季節の 6 月とする說と齟齬なく相關する（表 4，4-4）。

29） ただし，後述（1-2-4-2-③.）する『島史』XI. 14. に見られる「最上の額沙荼の星宿」にその日の月がかかる日が 16 日（あるいは 15 日）であれば，〈末伽始羅月（9 月）〉ではなく〈報沙月（10 月）〉である可能性もあろう。この點は，Fleet 氏がアショーカ王の卽位日を算定するにあたり根據とした『大史』XI. 40-41.「末伽始羅月の新月昇る日」の有效性について疑問を投げかける理由ともなろう。要檢討。

◇『大唐西域記』（巻 2）「また一年を六つの季節に分ける。…（唐暦で）9 月 16 日から 11 月 15 日（したがってインド暦で 9 月 1 日から 10 月末日）までは漸寒（すなわち冬に相當する季節）である。[30]」

◇『大唐西域記』（巻 2）「佛の教え（如來聖教）では，一年を三つの季節に分ける。…（唐暦で）9 月 16 日から 1 月 15 日（したがってインド暦で 9 月 1 日から 12 月末日）までは寒時（すなわち冬に相當する季節）である。[31]」

また，次の『大唐西域記』の內容によれば，「冬の第二月」は 11 月とも解釋されるが，こちらでも先述（1-2-4-1-④.）したマヒンダの來島月を 6 月とする說と齟齬なく相關する（表 4，4-4）。

◇『大唐西域記』（巻 2）「冬の三ヶ月とは，報沙月と磨祛月と頗勒窶拏月のことをいう。すなわちこれは（唐暦で）10 月 16 日から 1 月 15 日（したがってインド暦で 10 月 1 日から 12 月末日）までに當たる。[32]」

（1-2-4-3.）次に表 3 にしめすアショーカ王の卽位月に關する情報を分析する。

① 表 3 可能性 1，暦月名に關する情報からしられる 1 月か 2 月か 3 月。次の『島史』の內容によれば，アショーカ王の在位第 18 年「六ヶ月の時」にデーヴァーナンピヤ王は卽位したとされる。先述（1-2-4.）したとおり，この「六ヶ月の時」については解釋が分かれる。すなわち「第 6 月目」とする解釋と「第 6 月が經過した第 7 月目」とする解釋がある。どちらをとるべきか筆者には判定できないので，とりあえずどちらも有效と見ておくことにする。それで，先述（1-2-4-2-①.）したように，デーヴァーナンピヤ王は 8 月に卽位したのであれば，アショーカ王の卽位月は 1 月か 2 月か 3 月ということになろう（表 5，5-1）。

◇『島史』XI. 14. 前揭（1-2-4.）。

② 表 3 可能性 2，暦月名に關する情報からしられる 2 月か 3 月か 4 月。『大史』には，アショーカ王の卽位月とデーヴァーナンピヤ王の卽位月との相關をしめす內容は見られないが，『大史』の關連箇所には〈アショーカ王の卽位第 18 年第 6 月目あるいは第 7 月目にデーヴァーナンピヤ王は卽位した〉とする『島史』の內容と齟齬をきたす內容は見

30）『大唐西域記』（巻 2）T51,875c「又分一歲。以爲六時。…九月十六日至十一月十五日。漸寒也。」

31）『大唐西域記』（巻 2）T51,876a「如來聖敎。歲爲三時。…九月十六日至正月十五日。寒時也。」

32）『大唐西域記』（巻 2）T51,876a「冬三月謂。報沙月，磨祛月，頗勒窶拏月。當此從十月十六日。至正月十五日。」

られないので，『大史』は『島史』と同様な文脈をもって記されていると理解しておいてよいであろう。そうであれば，『大史』はデーヴァーナンピヤ王の卽位月を9月とするので，アショーカ王の卽位月は2月か3月か4月ということになろう（表5，5-2）。

③　表3可能性3，季節に關する情報から推定される1月か2月か3月か4月。先述（1-2-4-2-③.）したように，デーヴァーナンピヤ王は8月あるいは9月に卽位したのであれば，①を參考にすると，アショーカ王の卽位月は1月か2月か3月か4月ということになろう（表5，5-1と5-2）。

④　表3可能性4，季節に關する情報から推定される3月か4月か5月か6月。先述（1-2-4-2-④.）したように，デーヴァーナンピヤ王は10月あるいは11月に卽位したのであれば，①を參考にすると，アショーカ王の卽位月は3月か4月か5月か6月ということになろう（表5，5-3と5-4）。

1-2-5. シャカの入滅日とアショーカ王の卽位月と第三結集の閉會日とマヒンダの來島年月

ここでは，〈シャカの入滅日〉と〈アショーカ王の卽位月〉と〈第三結集の閉會日〉と〈マヒンダの來島年月〉の四者に關する情報を相關分析する。シャカの入滅日が2月末日であれば，四者に關する情報の內容がともに成立することはなく齟齬をきたすが，一方，8月22日であれば問題はないことを確認する。この點は，シャカの入滅日は8月22日であったらしいことをしめすものといえよう。

（1-2-5-1.）先述（1-2-2-3.）したとおり，南傳によれば，第三結集が閉會された時點は，〈アショーカ王の在位第17年目〉でかつ〈シャカの入滅後236年目〉とされる（表2）。この情報は，シャカの入滅日（ひいては入滅年）を算定する上で相關の材料となるので重要である。そして，ここで注目したいのが次の『大史』V. 281の內容で，第三結集が閉會された日が「大自恣の日」とされる點である。

◇『大史』V. 281.「斯くて一千人の比丘により，阿育王の保護によりて，この正法會誦は九ヶ月にして終りたり。王の［卽位］第十七年，彼仙士は年七十二歲，大自恣の日に會誦を終りたり。」

「大自恣の日」とは，雨安居（夏安居）の最終日のことであろうから[33]，先述（1-1-4.）した玄奘の說明によれば，その日は7月末日あるいは8月末日ということになろう。

それで，シャカの入滅日は2月末日と假定して（表3および表6），〈シャカの入滅日〉と

33）『望月佛敎大辭典』1779-1780，自恣。また，次によれば，マヒンダの來島年においてはインド曆で8月末日に自恣がおこなわれたとされる。『大史』XVII. 1.「大賢者なる大長老は雨安居を終わり，迦剌底迦月，滿月の日に自恣を行ひて，…」

〈アショーカ王の卽位月〉と〈第三結集の閉會日〉に關する情報を相關分析するに，雨安居の最終日（すなわち第三結集が閉會された時點，すなわち7月末日あるいは8月末日）が〈アショーカ王の在位第17年目でシャカの入滅後236年目〉となるのは，アショーカ王の卽位月が1月あるいは2月の場合のみである。卽位月が3月以降であれば，在位第17年目の7月末日あるいは8月末日をシャカの入滅後236年目に入れることはできなくなる。ところが，アショーカ王の卽位月が1月あるいは2月の場合，マヒンダの來島年月に關する情報と齟齬をきたしてしまう。というのは，先述（1-2-3. および1-2-4-1.）したところによれば，マヒンダの來島年月は，〈アショーカ王の在位第19年目でシャカの入滅後237年目〉の〈3月〉あるいは〈4月〉あるいは〈6月〉，いずれにせよ3月以降とされるからである。表3および表6から明らかなとおり，シャカの入滅日が2月末日であれば，とくにマヒンダの來島月が以上のいずれであっても，それを〈アショーカ王の在位第19年目〉でかつ〈シャカの入滅後237年目〉に入れることはできない。したがって，シャカの入滅日は2月末日ではないように思われるのである。

(1-2-5-2.）一方，シャカの入滅日は8月22日と假定した場合（表3および表7），第三結集が閉會された「大自恣の日」が7月末日であれば，この「大自恣の日」は〈アショーカ王の在位第17年目でシャカの入滅後236年目〉の日とはならず齟齬をきたす。一方，「大自恣の日」が8月末日であれば，齟齬をきたすことはなく，また，マヒンダの來島月が以上の〈3月〉あるいは〈4月〉あるいは〈6月〉のいずれであっても，それぞれの情報を齟齬なく相關させることができる。すなわち，シャカの入滅日が8月22日で「大自恣の日」が8月末日であれば，〈シャカの入滅日〉と〈アショーカ王の卽位月〉と〈第三結集の閉會日〉と〈マヒンダの來島年月〉の四者に關する情報の內容がいずれもともに成立し得るのである。以上のように考えるので，シャカの入滅日は2月末日ではなく8月22日とするFleet氏の說の結論には筆者は贊同するのである。

(1-2-5-3.）また，以上および次によれば，第三結集は九ヶ月の期間があり8月末日（すなわちシャカ入滅後月次第1月內）に閉會されたことになるので，表8にしめすとおり〈シャカの入滅後235年目で，インド曆の12月1日〉に開會され〈シャカの入滅後236年目で，インド曆の8月末日〉に閉會されたと見ておくこともできよう。

◇『島史』VII. 59.「この第三結集は，法王の建立せし阿育園精舍に於て行はれ，九ヶ月にして終了せり，と。」

◇『大史』V. 281. 前揭（1-2-5-1.）。

1-3. 小結

以上本章では，Fleet氏の說を檢證補說しながら考察をおこない，次の點を指摘した。

玄奘の『大唐西域記』によれば，シャカの入滅日については，〈2 月末日〉（正確には〈吠舍佉月の後半十五日すなわち白分十五日〉）あるいは〈8 月 22 日〉（正確には〈迦剌底迦月の後半八日すなわち白分八日〉）とする二つの説がある。南傳には〈2 月末日〉説をとることを明示する内容が確認されるが，その日では不自然なばかりか，南傳の〈その他の箇所の内容〉とも齟齬をきたしてしまう。一方，北傳に屬する説一切有部の〈8 月 22 日〉説は，南傳がしめす以上にいう〈その他の箇所の内容〉とも矛盾せずに成立し得るものである。したがって，二者擇一するのであれば，Fleet 氏が主張するように〈8 月 22 日〉説をとるべきであろう。ただし，〈8 月 22 日〉は，説一切有部の主要論書の一つである『婆沙論』によれば，〈秋分の日〉に當たる[34]。この點については，筆者には不自然なように思われないこともない。というのは，同じく『婆沙論』によれば，〈初轉法輪の日〉も〈8 月 22 日〉とされるからである[35]。したがって，以上にはあくまで二者擇一するのであればという條件を付しておきたい。また，Fleet 氏はさらに議論を展開して，シャカの入滅年は共通暦紀元前 483 年とするが（p. 22, p. 27），この點に關しては，筆者はまったく見解を異にする。その理由は以下において説明していくとおりである。なお，以下では，より蓋然性の高い候補日はしられないので，とりあえず〈シャカの入滅日〉は〈8 月 22 日〉と見て考察をおこなうことにする。

第 2 章，北傳によるシャカの入滅年

2-1. シャカの入滅年とアショーカ王の卽位年

これより小稿の主題である，シャカの入滅年について檢討する。現在のところ，北傳の方が南傳よりも有效であろうと廣く考えられているようであるから[36]，先ずは北傳の内容から分析する。筆者は思うに，シャカの入滅年は，實のところ，いわゆる北傳からだけでは，正確なところは算定できないであろう。というのは，アショーカ王の卽位年がシャカの入滅後何年であったのかよくわからないからである。アショーカ王の卽位年と佛典に記された年次であるシャカの入滅後「百年」あるいは「百十年」あるいは「百十六年」との關係が必ずしも明らかではないのである。佛典が記すところによれば，大

34）『阿毘達磨大毘婆沙論』（卷 136）T27,701c「謂。羯栗底迦月。白半第八日。晝夜各十五牟呼栗多。」

35）『阿毘達磨大毘婆沙論』（卷 182）T27,914c「於迦栗底迦月。白半八日。如來爲彼。轉正法輪。時憍陳那。最初見法。」

36）山崎元一，1989 年，168 頁，173 頁。

きく見れば目安として，次の三つの可能性を検討しておかなければならないであろう。

アショーカ王の即位年は，「はじめに」で述べたように前 268 年頃と見るとして，もしそれが，

① シャカの入滅後「百十六年」であれば，シャカの入滅年は前 384（＝268＋116）年頃，

② シャカの入滅後「百十年」であれば，シャカの入滅年は前 378（＝268＋110）年頃，

③ シャカの入滅後「百年」であれば，シャカの入滅年は前 368（＝268＋100）年頃となる。

近年の最も有力な説は，アショーカ王の即位年はシャカの入滅後「百十六年」と見て，シャカの入滅年は前 384 年頃（數えでは前 383 年頃）とする[37]。しかしながら，必ずしもそのようには言い切れないであろう。北傳のみによる限り，以上の三つの可能性は，いずれも有效と見なしておくしかないであろう。ここ（正確には 2-1-3-3. まで）では以上のように考える理由を述べる。

なお，北傳における漢數字表記の年次たとえば「百十六年」は，原則的にはそのままの引用をしめすが，場合によっては，正確には〈116 年目〉あるいは〈116 年が經過した 117 年目〉のいずれであるのか，それをとりあげる時點で必ずしも斷定できないことをも意味する。他の年次の場合も同様である。ただし，筆者は思うに，年次の表記は北傳も南傳も基本的には經年によるものであろう（先述 1-2-2-3. および後述 3-5.）。すなわち，「百十六年」であれば，〈116 年が經過した 117 年目〉という意味であろう。

2-1-1. シャカの入滅年は〈前 384 年頃〉か

（2-1-1-1.）次の北傳は，アショーカ王がシャカの入滅後「百十六年」に少なくとも在位していたことを明らかにしめすものである。近年の最も有力な説は，次の漢譯の內容を入滅後「百十六年」に「アショーカ王がインド（閻浮提）に王となった」と解釋し，その說の論據とする。そしてそれにより，シャカの入滅年は前 384 年頃と見る。しかしながら，次のように入滅後「百十六年」に「王であった（すなわち，すでに王となり王としてインドを支配していた）」と讀むことも可能であろう。したがって，入滅後「百十六年」に即位したとは必ずしも言い切れないであろう[38]。それゆえ，シャカの入滅年は前 384 年頃とする說には直ちにはしたがえないのである。ただし，否定してしまうこともできな

37） ただし，先（「はじめに」の注）でも述べたとおり，正確には數えをもって共通曆紀元前 383 年とされる。中村元，1997 年」，609 頁。なお，次はシャカの入滅を前 383 年とするので同様に考えていることがしられる。平川彰『インド佛教史』上（春秋社，2011 年），33-34 頁。

38） 根本分裂の年であろうとする解釋が，次によってしめされている。山崎元一『アショーカ王とその時代：インド古代史の展開とアショーカ王』（春秋社，1982 年），269 頁。

いであろう。

◇『部執異論』（巻 1）「このように聞かされた。佛世尊の入滅の後百年が經過すると，あたかも輝く太陽が西の山に隠れてしまったかのごとくであった。百年が過ぎて後さらに十六年には，一大國があった。名はパータリプトラといった。王の名はアショーカといい，王として閻浮提を支配していた。大きな白い蓋がすべての天下を覆っているかのようであった。このような時に大勢集まった者たちは分裂した。…分かれて二つの部派をなした。一つ目は大衆部といい，二つ目は上座弟子部といった。[39]」

◇『十八部論』（1 巻）「我れは先人より（このように）聞いた。佛（如來）は人々にとって太陽のようなものであった。佛の入滅の後百十六年には，都城がありパータリプトラといった。この時にはアショーカ王がいて，閻浮提を王として支配し，天下を安んじていた。この時に大勢集まっていた僧たちは分裂した。…ここにおいて佛教徒ははじめて二つの部派に分かれた。一つ目は摩訶僧祇といい，二つ目は他鞞羅［漢語で上座部］といった。[40]」

(2-1-1-2.）次は玄奘が譯した『異部宗輪論』の内容であるが，異譯である以上にあげた『部執異論』および『十八部論』の内容に相當する箇所に，入滅後「百十六年」という記載は見られない。參考としてその内容をしめしておこう。

◇『異部宗輪論』（1 巻）「このように傳え聞いた。佛が般涅槃して後百年餘りには，佛の在世の時代から去ること久しく，太陽が久しく沒してしまったかのごとくであった。マガダ國のクスマプラ（後のパータリプトラ）に王がいてアショーカと號し，閻浮提を統べ治めていた。あたかも一つの白い蓋（が天下を覆い）人と神を導き安んじているかのようであった。この時になって大勢の佛教徒たちははじめて分裂した。…分かれて二つの部派をなした。一つ目は大衆部といい，二つ目は上座部といった。[41]」

(2-1-1-3.）次の北傳は，アショーカ王の卽位がシャカの入滅後第 2 世紀であったことをしめすものとしてあげられるかもしれない。というのは，アショーカ王がシャカの入滅後「百年」以降（すなわち入滅後第 2 世紀）に生まれたとも解釋し得るからである。もしそ

39）『部執異論』（巻 1）T49,20a「如是所聞。佛世尊滅後。滿一百年。譬如朗日隱頞悉多山。過百年後。更十六年。有一大國。名波吒梨弗多羅。王名阿輸柯。王閻浮提。有大白蓋。覆一天下。如是時中。大眾破散。…分成兩部。一大眾部。二上座弟子部。」

40）『十八部論』（1 巻）T49,18a「我從先勝聞。如來人中日。佛滅度後。百一十六年。城名巴連弗。時阿育王。王閻浮提。匡於天下。爾時大僧。別部異法。…此是佛從。始生二部。一謂摩訶僧祇。二謂他鞞羅［秦言上座部也］。」

41）『異部宗輪論』（1 巻）T49,15a「如是傳聞。佛薄伽梵。般涅槃後。百有餘年。去聖時淹。如日久沒。摩竭陀國。俱蘇摩城。王號無憂。統攝贍部。感一白蓋。化洽人神。是時佛法。大眾初破。…分爲兩部。一大眾部。二上座部。」

うであれば，その年齢から判斷するに，アショーカ王はシャカの入滅後「百十六年」以降に卽位した可能性が大きくなってこよう。裏返せば，シャカの入滅年は前 384 年頃以前であったということになってこよう。けれども，そうであれば，先述（2-1-1-1.）した入滅後「百十六年」にアショーカ王が在位していたことを明らかにしめす內容と齟齬をきたしてしまう。したがって，次の內容は，直ちには用いられないであろう。ちなみに，異譯である『阿育王傳』は「涅槃に入って百年の後に，…生まれ（た）」とはしない（後述 2-1-3-1.）。また『佛臨涅槃記法住經』のように，アショーカ王はシャカの入滅後第 1 世紀に卽位したことを明らかにしめす佛典もある（後述 2-1-3-3.）。

◇『阿育王經』（卷 1）「世尊はまた言った。『この子は，我れが涅槃に入って百年の後に，パータリプトラに生まれ，王となり，名をアショーカといい，四天下の一つ（である閻浮提を統べ治める）轉輪聖王となり，佛の敎えを信じ喜ぶであろう。大いに舍利を供養し，八萬四千の塔を起こし，多くの人々に惠みを與えるであろう』と。[42]」

2-1-2. シャカの入滅年は〈前 378 年頃〉か

先述（2-1-1-1.）したシャカの入滅後「百十六年」の內容からはアショーカ王の在位がしられるが，入滅後「百十年」のことを記す佛典の內容からはアショーカ王の存在は確認されない。この點は，あるいはアショーカ王がシャカの入滅後「百十年」以降（「百十六年」以前）に卽位したことを意味するものかもしれない[43]。もしそうであれば，シャカの入滅年は（前 384 年頃以降）前 378 年頃以前のある時點ということになってこよう。ただし，入滅後「百十年」の內容はアショーカ王の存在を必ずしも否定してしまうものではなく，ただ言及していないだけである可能性もあろう（後述 4-3.）。したがって，嚴密なところは斷定できないであろう。たとえば，次の北傳は，入滅後「百十年」に，ヴァイシャーリーにおいて，いわゆる十事（十の非法）の問題が起こったことをしめす。十事をよしとする者たちが結集をおこなったことを記すものとして注目される內容ではあるが，アショーカ王については言及がない。

◇『十誦律』（卷 60）「佛が般涅槃して後百十年に，ヴァイシャーリー國で十事（の問題）が起こった。この十事とは法にかなったものではなく良いものではなかった。佛法とはるかにたがうものであった。經の敎えにかなわず，律の定めにたがい，また法の決まり

42）『阿育王經』（卷 1）T50,132a-132b「世尊又言。此兒者。我入涅槃百年後。當生波吒利弗多城。王名阿育。爲四分轉輪王。信樂正法。當廣供養舍利。起八萬四千塔。饒益多人。」

43）たとえば次は，シャカの入滅後「百年」あるいは「百十年」に開かれたとされる結集を記す律書の內容にアショーカ王の名が見られない點に注目する。Andre Bareau : 'La Date du Nirvana'. in : *Journal Asiatique*, T. 241, 1953, pp. 27-62, p. 42. 山崎元一，1982 年，269 頁。

を破るものであった。この十事をヴァイシャーリー國の多くの僧たちは法として用い法として行い，法として清淨なものであると主張した。[44]」

2-1-3. シャカの入滅年は〈前 368 年頃〉か

(2-1-3-1.）次の北傳は，シャカの入滅後まさに「百年」にアショーカ王が卽位したことをしめす例としてあげられるかもしれない。しかしながら，「百年の後」というのはあるいはおおよその時を意味し，入滅後第 2 世紀のある時點をしめすものである可能性もあろう。したがって，嚴密なところは斷定できないであろう。

◇『雜阿含經』（卷 23）「世尊はアーナンダに語って言った。『…アーナンダよ。まさに知っておくべきである。我れが入滅して百年の後に，この童子はパータリプトラにおいて（四天下の）一つ（である閻浮提）を統べ治め轉輪聖王となる。姓は孔雀，名はアショーカといい，正しい法をもって世の人々を治め導く。またさらに我れの舍利を廣く配り，八萬四千の法王の塔を造って，無量の衆生を安樂にするであろう』と。[45]」

◇『阿育王傳』（卷 1）「佛は言った。『我れがすなわち涅槃して百年の後に，この小兒は轉輪聖王となり四天下の一つ（を統べ治める）であろう。パータリプトラにおいて政法の王となり，アショーカと號し，我れの舍利を分かち配り，そして八萬四千の寶塔を作り，衆生に惠みを與える（であろう）』と。[46]」

(2-1-3-2.）次の北傳は，シャカの入滅後「百年」において，アショーカ王がすでに在位していたことをしめすものとしてあげられるかもしれない。換言すれば，アショーカ王の卽位年はシャカの入滅後第 1 世紀のある時點であった可能性をしめすものといえるかもしれない。ただし，先述（2-1-3-1.）と同樣に，「百年の後」というのはあるいはおおよその時をしめすものと見ることもできよう。そうであれば，卽位はシャカの入滅後第 2 世紀になってからであった可能性も出てこよう。したがって，嚴密なところは斷定できないであろう。

◇『阿育王經』（卷 1）「さらにまた大王は佛によって（次のように）說かれたとおりであった。『我れが涅槃に入りて百年の後に，パータリプトラに王がいるであろう。名はア

44）『十誦律』（卷 60）T23,450a-b「佛般涅槃後。一百一十歲。毘耶離國十事出。是十事非法非善。遠離佛法。不入修妬路。不入毘尼。亦破法相。是十事。毘耶離國諸比丘。用是法行是法。言是法淸淨。」

45）『雜阿含經』（卷 23）T02,162a「世尊告阿難曰。…阿難當知。於我滅度。百年之後。此童子於。巴連弗邑。統領一方。爲轉輪王。姓孔雀。名阿育。正法治化。又復廣布我舍利。當造八萬四千。法王之塔。安樂無量眾生。」

46）『阿育王傳』（卷 1）T50,99c「佛言。我若涅槃百年之後。此小兒者。當作轉輪聖王。四分之一。於花氏城。作政法王。號阿恕伽。分我舍利。而作八萬。四千寶塔。饒益眾生。」

ショーカといい，四天下の一つ（を統べ治める）轉輪聖王となり，我れの舍利を大いに供養し，八萬四千の塔を起こす（であろう）』と。[47]」

◇『雜譬喩經』（巻 1）「昔，佛が般泥洹し，時が過ぎること百年の後に，アショーカ王がいて，佛法を心から願い求めていた。（その）國中には二萬人の比丘がいて，王は常に彼等をもてなしていた。多くの九十六種の外道たちは嫉妬の思いをいだき，佛法を滅ぼそうと企てて，自ら共に集まり，手段を思い考えた。[48]」

◇『眾經撰雜譬喩』（巻 2）「昔，佛が涅槃して後の百年に，王がいて名はアショーカといった。大いにおごり建築群を方十里の地に作らせた。いずれ（の建物）も，多くの小國の畫工を呼び寄せて，畫工が來れば思うがままに，様々な形像を描かせていた。[49]」

◇『大智度論』（巻 2）「答えて曰く。佛が在世の時には，法に矛盾するところはなかった。佛が入滅して後，初めて結集があった時にも（依然）佛が在世の時と同様であった。（けれども入滅）後百年に，アショーカ王が五年に一度の供養の催し（般闍于瑟大會）をおこなった時には，多くの大法師が說くところは（それぞれ）たがうものであったので，異なる部派の名稱があった。[50]」

(2-1-3-3.）次の北傳は，玄奘が譯した『佛臨涅槃記法住經』の內容で，アショーカ王の卽位がシャカの入滅後第 1 世紀（したがってシャカの入滅年は前 368 年頃以降）であったことを明らかにしめすものである。しかしながら，孤立した說のようでもあり，次のみをもって他の說を直ちに否定してしまうことはむずかしいであろう。したがって，少なくとも今この時點においては，とりあえず一說として扱っておくしかないであろう（後述 2-6. および 3-3-①.）。

◇『佛臨涅槃記法住經』（巻 1）「アーナンダよ。（次のことを）知っておくべきである。我れが涅槃して後の第一百年（すなわち入滅後第 1 世紀）においては，我が敎えに說く法はしっかりとしていて破られることはない。…一百年末（すなわち入滅後第 1 世紀末）には偉大な國王がいて，名はアショーカといい，この世に現れて，偉大な能力をもち，王として贍部洲（閻浮提）を（統べ治める）。[51]」

47）『阿育王經』（巻 1）T50,134c「復次大王如佛所記。我入涅槃百年後。於波吒利弗多城。當有王。名阿輸柯。作四分轉輪王。於我舍利。廣作供養。起八萬四千塔。」

48）『雜譬喩經』（巻 1）T04,503b「昔佛般泥洹。去百年後。有阿育王。愛樂佛法。國中有二萬比丘。王恒供養之。諸九十六種外道。生嫉妬意。謀欲敗佛法。自共聚會。思惟方便。」

49）『眾經撰雜譬喩』（巻 2）T04,541c「昔佛涅槃後百年。有王名阿育。大憍奢作殿舍。縱廣十里。皆召諸小國畫師。畫師至各隨意。畫作種種形像。」

50）『大智度論』（巻 2）T25,70a「答曰。佛在世時。法無違錯。佛滅度後。初集法時。亦如佛在。後百年。阿輸迦王作。般闍于瑟大會。諸大法師。論議異故。有別部名字。」

51）『佛臨涅槃記法住經』（巻 1）T12,1113a「阿難當知。我涅槃後。第一百年。吾聖敎中。聖法↗

2-2. 玄奘の傳えとカニュシカ王の卽位年

以上のようにいわゆる北傳のみによる限り，シャカの入滅年は，正確には算定困難であり，あるいは前 384 年頃，あるいは前 378 年頃（前 384 年頃以降，前 378 年頃以前），あるいは前 368 年頃のいずれかと見ておくしかないであろう。したがって，さらなる考察のためにはその他の情報が必要となるが，ここではシャカの入滅年とカニシュカ王の卽位年との相關分析を可能にする資料として，唐の玄奘の傳えがあることを指摘する。なお，後述（2-4.）するとおり，この玄奘の傳えは大いに參考になりそうである。

玄奘の傳えは，カニシュカ王がシャカの〈入滅後「五百年」〉すなわち〈入滅後第 5 世紀あるいは第 6 世紀〉入りの少し前（したがって入滅後第 4 世紀あるいは第 5 世紀）に在位し結集をおこなったことをしめすものである。したがって，アショーカ王の卽位年は，「はじめに」で述べたように前 268 年頃と見るとして，もしそれが，

① シャカの入滅後「百十六年」であれば，シャカの入滅年は前 384（＝268＋116）年頃となるから，シャカの入滅後「五百年」入りは〈後 17 年頃あるいは後 117 年頃〉，

② シャカの入滅後「百十年」であれば，シャカの入滅年は前 378（＝268＋110）年頃となるから，シャカの入滅後「五百年」入りは〈後 23 年頃あるいは後 123 年頃〉，

③ シャカの入滅後「百年」であれば，シャカの入滅年は前 368（＝268＋100）年頃となるから，シャカの入滅後「五百年」入りは〈後 33 年頃あるいは後 133 年頃〉となる（表 9）。したがって，カニシュカ王は以上のいずれかの年の少し前に在位していたことになろう。ここでは以上の點について確認しておこう。

(2-2-1.）次の玄奘の傳えは，カニシュカ王がシャカの入滅後「四百年」（あるいは入滅後「第四百年」）に在位していたことをしめす。ただし，これだけでは「四百年」が第 4 世紀であるのかあるいは第 5 世紀であるのかは，今この時點においては不明というしかないであろう[52]。

◇『大唐西域記』（卷 2）「シャカ如來はアーナンダに語って言った。『我れが世を去って後四百年には，王がいて世に知られていよう。（その王は）カニシュカと號する。ここから

↘ 堅固。…一百年末。有大國王。名阿輸迦。出現於世。具大威力。王贍部洲。」なお，以上にいう「第一百年」は前後の文脈により第 1 世紀を意味すると筆者は判斷する。

52) たとえば，玄奘が譯した『異部宗輪論』T49,15a にいう入滅後「第二百年」は文脈から入滅後〈第 2 世紀〉であることがしられる。したがって，「四百年」は直ちには〈第 5 世紀〉であるとはいえないであろう。一方，唐の辯機が 646 年に編纂した玄奘の『大唐西域記』の表記法が『異部宗輪論』の表記法と同じであると斷定することも直ちにはできないであろう。なお，後述（2-4.）するところによれば，『大唐西域記』にいう「四百年」は〈第 5 世紀〉を意味することがしられる。

南に遠くないところにストゥーパが建てられ，我れが身に有される骨肉の舎利の多くがその中に集められよう』と。菩提樹の南にストゥーパがあった。（それは）カニシュカ王によって建てられたものであった。カニシュカ王は，如來が涅槃して後第四百年に，時に君臨し閻浮提（贍部洲）を統べ治めた。[53]」

◇『婆沙論』（巻 200）「三藏法師の玄奘がこの論を譯し終わり二頌を述べて言う。『佛が涅槃して後四百年に，カニシュカは贍部洲に王であった。五百人の阿羅漢を呼び集め，カシュミールで三藏の佛典をとき明かさせた。その中に『阿毘達磨大毘婆沙論』があった。そのすべての文章を今ここに譯し終わった。願わくは，これらが多くの衆生に惠みを施し，（それによって多くの衆生が）速やかに悟りを開き涅槃に至れるように』と。[54]」

（2-2-2.）次の玄奘の傳えは，カニシュカ王がシャカの〈入滅後「五百年」〉すなわち〈入滅後第 5 世紀あるいは第 6 世紀〉入りの少し前（したがって入滅後第 4 世紀あるいは第 5 世紀）に在位し結集をおこなったことをしめすものといえよう。ただし，これだけでは「五百年」が第 5 世紀であるのかあるいは第 6 世紀であるのかは，今この時點においては不明というしかないであろう。

◇『大唐西域記』（巻 2）「如來が世を去ってから五百年になる少し前に，偉大な阿羅漢がいてカシュミール（迦濕彌羅）國より教化に出てこの地にやって來た。…その阿羅漢は言った。『…近頃，カニシュカ王は（說一切有部の論者である）パールシュバとともに五百人の賢聖をカシュミール國に招集して『大毘婆沙論』を編纂した。…』と。[55]」

◇『大唐大慈恩寺三藏法師傳』（巻 2）「その後ガンダーラ國にカニシュカ王がいた。如來の入滅後第四百年に，パールシュバ（脇尊者）が內には經律論の三藏を究め外には五明の學問に通じた多くの聖衆を招いたところ，四百九十九人および尊者としてしられる世友の合わせて五百人の賢聖が集まったので，そこで三藏の典籍を結集した。先ず十萬頌の『鄔波第鑠論』［かつては優波提舍と音譯された］を編集し，經藏の典籍［かつては修多

53）『大唐西域記』（巻 2）T51,879c「釋迦如來。…告阿難曰。我去世後。當四百年。有王命世。號迦膩色迦。此南不遠。起窣堵波。吾身所有。骨肉舍利。多集此中。卑鉢羅樹。南有窣堵波。迦膩色迦王，之所建也。迦膩色迦王。以如來涅槃之後。第四百年。君臨膺運。統贍部洲。」

54）『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻 200）T27,1004a「三藏法師玄奘譯斯論訖說二頌言。佛涅槃後四百年。迦膩色加王贍部。召集五百應眞士。迦濕彌羅釋三藏。其中對法毘婆沙。具獲本文今譯訖。願此等潤諸含識。速證圓寂妙菩提。」

55）『大唐西域記』（巻 2）T51,881c-882a「如來去世。垂五百年。有大阿羅漢。自迦濕彌羅國。遊化至此。…阿羅漢曰。…近迦膩色迦王。與脇尊者。招集五百賢聖。於迦濕彌羅國。作毘婆沙論。…」なお，木村泰賢氏は，カニシュカ王の結集は必ずしも否定することのできない事實と見るものの，その時には『大毘婆沙論』の編纂はなかったと考える。木村泰賢『阿毘達磨論の研究』木村泰賢全集第 4 巻（大法輪閣，2004 年），179 頁，211 頁。

羅と音譯された］を注釋した。次に十萬頌の『毘奈耶毘婆沙論』を編集し，律藏の典籍［かつては毘耶を音譯された］を注釋した。次に十萬頌の『阿毘達磨毘婆沙論』を編集し，律藏の典籍［あるいは阿毘曇と音譯される］を注釋した。全部で三十萬頌九十六萬言をなすものとなった。王は赤銅で板を作り，文章を彫り込み，（それを）石の箱に收め封をし，大きなストゥーパを建て，（それを）その中に安置し，藥叉神に守護させた。[56]」

2-3.『ヤヴァナジャータカ』とカニュシカ王の卽位年

ここではカニシュカ王の卽位年について確認する。Harry Falk 氏による，インドのスプジドバジャ Sphujidhvaja（共通曆紀元後第 3 世紀頃か）が撰述した天文學書『ヤヴァナジャータカ the *Yavanajātaka*』に見られるスタンザ（詩を構成する節をなす部分）stanza 79,15 の內容の分析により[57]，インド・クシャーナ朝の大王であったカニシュカ王（正確にはカニシュカⅠ世）の卽位年問題がほぼ全面的に解決し，卽位年は後 127 年頃ということになった。筆者は思うに，現在のところ同氏の說にしたがうしかないであろう[58]。

56）『大唐大慈恩寺三藏法師傳』（卷 2）T50,231b-c「其後健陀羅國。迦膩色迦王。如來滅後。第四百年。因脇尊者。請諸聖眾。內窮三藏。外達五明者。得四百九十九人。及尊者世友。合五百賢聖。於此結集三藏。先造十萬頌。鄔波第鑠論。［舊曰。優波提舍。訛也。］釋素呾纜藏。［舊曰。修多羅。訛也。］次造十萬頌。毘奈耶毘婆沙論。釋毘奈耶藏。［舊曰。毘耶。訛也。］次造十萬頌阿毘達磨毘婆沙論。釋阿毘達磨藏。［或曰。阿毘曇。訛也。］凡三十萬頌。九十六萬言。王以赤銅爲鍱。鏤寫論文。石函封記。建大窣堵波。而儲其中。命藥叉神守護。」

57）Harry Falk : 'The Yuga of Sphujiddhvaja and the Era of the Kusṣânṇas'. in : *Silk Road Art and Archaeology,* Vol. 7, 2001, pp. 121–136. Harry Falk : 'The Kanisṣka Era in Gupta Records'. in : *Silk Road Art and Archaeology*, Vol. 10, 2004, pp. 167–176. Harry Falk : 'Ancient Indian Eras : An Overview'. in : *Bulletin of the Asia Institute*, Vol. 21, 2007, pp. 131–145. Harry Falk（ed.）: *Kushan Histories : Literary Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin, December 5 to 7, 2013*, Bremen, 2015.

58）カニシュカ王の卽位年についての諸說については次も詳しい。Robert Bracey : 'The Date of Kanishka since 1960'. in : *Indian Historical Review* 44（1）, 2017, pp. 21–61, pp. 46–47. 高田修，1967 年，162–170 頁。なお，高田氏自身は後 143 年から 152 年の閒と見て共通曆紀元後第 2 世紀の中葉とする（167 頁）。また，桑山正進氏は，次の論考で丘就却（クジュラ・カドフィセス王）の歿年は後 26 年以前とし（120 頁），カニシュカ王の卽位年については〈後 127 年〉よりも年次が遡る〈後 78 年〉說が有力と見る（121–122 頁）。桑山正進「貴霜丘就却の歿年」（『東方學報』92，2017 年），77–134 頁。しかしながら，筆者は思うに，同氏の說は Falk 氏の〈後 127 年〉說を否定することには成功していないであろう。というのは次のようにも考えられるからである。同氏は，『後漢書』（卷 88）大月氏國傳「初月氏爲匈奴所滅。遂遷於大夏。分其國爲休密，雙靡，貴霜，肸頓，都密，凡五部翕侯。後百餘歲。貴霜翕侯丘就卻。攻滅四翕侯。自立爲王。國號貴霜。」に見られる「後百餘歲」は大月氏がアム河上流に移動した年から「後百餘歲」とし年次を遡らせるべき理由とするが（116 頁），Falk 氏が指摘するように（2015, p. 85），移動の後に「五部翕侯」が置かれた年から「後百餘歲」と見てもよいであろう。また，同氏は議論していないが，「後百餘歲」の「餘歲」については，たとえば『後漢書』（卷 63）李固傳に「陽嘉二年（後 133 年）」が「漢興りて↗

(2-3-1.) Falk 氏は，シャカ紀元 1 年を共通暦紀元後 78 年（筆者は思うに，したがってシャカ紀元數え年數−1＝シャカ紀元經過年數で，シャカ紀元經過年數+78＝共通暦紀元後數え年數）とした上で，『ヤバナジャータカ』に見られるスタンザを次のように解釋する。なお，日本語への重譯は意譯するので，筆者の解釋が加わってしまう。それゆえ，注にしめす原譯も參照していただきたい。

◇『ヤバナジャータカ』stanza 79,15「クシャーナ紀元經過年數に 149 を足せば，シャカ紀元經過年數になる。このシャカ紀元經過年數に 56 を足したものから，すでに經過してしまった先のユガ周期年數である 165 を引けば，次のユガ周期における經過年數が求まる。[59]」

なお，先のユガ周期は共通暦紀元後 22 年から後 187 年までの 165 年間とされる[60]。

筆者は思うに，同氏が解釋するところのとくに重要な箇所は，次のようにも表記できよう。

シャカ紀元經過年數+78＝共通暦紀元後數え年數。

シャカ紀元經過年數＝クシャーナ紀元經過年數+149[61]。

したがって，

シャカ紀元經過年數+78＝(クシャーナ紀元經過年數+149)+78＝共通暦紀元後數え年數。

したがって，

クシャーナ紀元 1 年すなわちクシャーナ紀元數え年數＝1 すなわちクシャーナ紀元經過年數＝0 のとき，

(クシャーナ紀元經過年數+149)+78＝(0+149)+78＝227＝ 共通暦紀元後數え年數

よって，

クシャーナ紀元 1 年＝共通暦紀元後 227 年。

↘ (前 206 年) 以來三百餘年」とされるのが參考になろう。〈338 年〉が「三百餘年」とされる。したがって，「後百餘歲」というのはかなり緩い表現と見てよいであろう。それゆえ，年次をあえて遡らせる必要はなく，Falk 氏の說は依然有效なように筆者には思われるのである。いずれにせよ，桑山氏の論考は〈後 127 年〉說の檢證を主題としたものではないので，以上に關してはさらに議論の展開が必要であろう。

59) Falk, 2001, pp. 126-127. “The elapsed years of the Kusṣânṇas in combination with 149 (change into) the time of the Śakas. Subtracting from this (Śaka time [plus 56]) the elapsed (*yuga*, i. e. 165 years) (produces) the elapsed years of the second *yuga*.”

60) Falk, 2001, p. 127.

61) これは，シャカ紀元がクシャーナ紀元とは異なるものであることを明らかにしめすものとして注目されよう。これにより，カニシュカ王の卽位年は共通暦紀元後 78 年頃ではないことになるのである。Falk, 2007, p. 134.

さらに同氏が主張するところをまとめれば，次のようになろう[62]。

しかしながら，カニシュカ王は共通暦紀元後第 3 世紀の人物とは考えられないので，以上のクシャーナ紀元 1 年は，正確にはクシャーナ紀元第 1 世紀ではなく第 2 世紀が始まった年すなわちクシャーナ紀元 101 年のこと（したがってクシャーナ紀元 101 年＝共通暦紀元後 227 年）で，そのクシャーナ紀元年數の 100 が省略されたものと思われる。このような「百の單位省略理論（いわゆる“dropped hundred theory”）」はすでに J. E. van Lohuizen-de Leeuw 氏によって說かれるところである。それゆえ，實際のクシャーナ紀元 1 年（すなわちカニシュカ王の卽位年頃）は共通暦紀元後 127 年（すなわちクシャーナ紀元 1 年＝共通暦紀元後 127 年）と考えられるのである。以上が，Falk 氏の主張の要點である。

(2-3-2.）一方，カニシュカ王の卽位年についての從來の研究の成果を總合的に再檢討した Robert Bracey 氏は，共通暦紀元後 227 年に始まったのは「後續する世紀 century」あるいは「第 2 の紀元 era」と見るべきであるから，「百の單位省略理論」を用いた Falk 氏の解釋は必ずしも絕對的に有效なものとはいえないので他の可能性もあり得るとするが，Falk 氏の後 127 年頃說はこれまでで最も蓋然性が高いものであることを認めている[63]。

(2-3-3.）筆者は以上の兩氏の解釋に對して異論はない。また，いずれにせよ後 127 年頃說と同等以上に蓋然性がある候補年はしられないので，以下においては，カニシュカ王の卽位年は後 127 年頃と見て檢討をおこなうことにする。

2-4. シャカの入滅年とカニシュカ王の卽位年

ここでは，アショーカ王の卽位年はシャカの入滅後「百十六年」あるいは「百十年」あるいは「百年」とする說はとりあえずいずれも有效と見て，玄奘の傳えを參考にしつつ，シャカの入滅年とカニシュカ王の卽位年に關する情報を相關分析する。そして，シャカの入滅年は前 368 年頃で，カニシュカ王の卽位年は後 127 年頃と見るべきであろうと思われる理由を述べる。

(2-4-1.）先述（2-2.）したところによれば，カニシュカ王はシャカの〈入滅後「五百年」〉すなわち〈入滅後第 5 世紀あるいは第 6 世紀〉入りする次のいずれかの年の少し前に在位し佛典の結集をおこなったようである。表 10 にしめすように，もしアショーカ王

62） Falk, 2001, p. 130. なお，Falk 氏は次で AD127 を ±127 とする。Falk, 2015, p. 9, p. 111.

63） Bracey, 2017, pp. 47-48, p. 50. Bracey 氏によれば，カニシュカ王の卽位年は共通暦紀元後第 2 世紀の前半とくに後 127 年（あるいはその前後數年 a few years）であった可能性がかなり高く，たとえば後 115 年あるいは後 144 年と見るのさえももはや困難であろうとされる。

の即位年が，

① シャカの入滅後「百十六年」であれば，シャカの入滅後「五百年」入りは〈後 17 年頃あるいは後 117 年頃〉，

② シャカの入滅後「百十年」であれば，シャカの入滅後「五百年」入りは〈後 23 年頃あるいは後 123 年頃〉，

③ シャカの入滅後「百年」であれば，シャカの入滅後「五百年」入りは〈後 33 年頃あるいは後 133 年頃〉となる。

(2-4-2.) 以上と，カニシュカ王の即位年とされる〈後 127 年頃〉とを相關分析するに，シャカの入滅後「五百年」入りの年として〈後 133 年頃〉以外はいずれも早すぎることは直ちに明らかであろう。これは裏返せば，アショーカ王の即位年はシャカの入滅後「百年」で，玄奘の傳えにいうシャカの入滅後「五百年」は入滅後〈第 6 世紀〉に當たることを意味するものであり，見落とされてはならない歴史的に重要な情報といえよう。またついでながら，カニシュカ王の即位年が後 127 年頃で，シャカの入滅後「五百年」入りの年が後 133 年頃であれば，後 133 年頃はカニシュカ王の在位第 7 年目頃に當たることになる。

なお，以上は換言すれば，アショーカ王の即位年はシャカの入滅後「百年」とする見方と，カニシュカ王の即位年は後 127 年頃とする解釋と，さらには玄奘の傳えは信じられるとする考え方のいずれもが，必ずしも絶對的にとはいえないものながら，少なくともともに成立する可能性があることをしめすものともいえよう。筆者は思うに，このような相關による通釋を可能にするカニシュカ王即位年〈後 127 年頃〉説を『ヤバナジャータカ』の內容の分析により Falk 氏が提起したことは，Falk 氏自身がどう考えているかはしらないが，非常に大きな業績といえよう。

2-5. アショーカ王の即位年とカニシュカ王の即位年

補足的ながら，次の玄奘の傳えも，以上で見たところと齟齬をきたすものではなく，玄奘の傳えにいうアショーカ王の即位年とカニシュカ王の即位年との相關關係に問題はなさそうである。この點は，これまで見てきた玄奘の傳えが北傳系のものとして有效であることをしめすものでもあろう。

先述（2-4-2.）したところによれば，玄奘の傳えにいうシャカの入滅後「五百年」は入滅後〈第 6 世紀〉を意味する。そうであれば，次の玄奘の傳えにいうところは，アショーカ王はシャカの入滅後「第一百年」（したがって入滅後〈第 2 世紀〉），カーティヤーヤニープトラは「第三百年中」（したがって入滅後〈第 4 世紀〉）の人物ということになろう。表 11 を參照。なお，カーティヤーヤニープトラは，おおよそ共通曆紀元前後の出世とす

る説もあれば[64]，前2世紀頃から前1世紀頃とする説もある[65]。また，彼の『發智論』はおそらく前1世紀後半の撰述であろうともいわれる[66]。

◇『大唐西域記』（巻8）「王の故宮の北に石柱がある。高さは數十尺。これはアショーカ王が牢獄を作ったところである。シャカ如來が涅槃して後の第一百年にアショーカ［中國語で無憂という意味で，かつては阿育と音譯された］王がいた。（彼は）ビンビサーラ［中國語で影堅という意味で，かつては頻婆娑と音譯された］王のひ孫で，ラージャグリハからパータリプトラに遷都し，（パータリプトラの）故城に（新たに）外郭を築きめぐらした。[67]」

◇『大唐西域記』（巻3）「マガダ國のアショーカ王は，如來が涅槃して後の第一百年に，世に知られ王として國を支配し，勢力は異國にも及んだ。深く佛法僧の三寶を信じ，四種の生まれの者たちをいつくしんだ。時に五百人の羅漢僧（上座部）と五百人の凡夫僧（大衆部）がいた。王によって敬われ區別なく供養されていた。凡夫僧（大衆部）にマハーデーヴァ［摩訶提婆，中國語で大天という意味］という者がいた。度量大きく智慧者であったが，ひそかに名譽と實利を求め，思いにひたっては議論をなした。その理屈は佛の教えにたがうものであったが，おおよそ聞き知る者たちはすべて群れとなり，その誤った説にしたがった。[68]」

◇『大唐西域記』（巻4）「シャカ如來が涅槃して後の第三百年中に，カーティヤーヤニープトラ［迦多衍那，かつては迦旃延と音譯された］論師がここにおいて『發智論』を撰述した。[69]」

2-6. 小結

以上から判斷するに，北傳（および關連情報）によれば，諸説あるものの，シャカの入滅年は前368年頃で，アショーカ王の卽位年は前268年頃で，カニシュカ王の卽位年は

64）『望月佛教大辭典』434-435 カタエンニシ迦多衍尼子。

65）*The Princeton Dictionary of Buddhism*, Kātyāyanīputra.

66）*The Princeton Dictionary of Buddhism*, Jñānaprasthāna.

67）『大唐西域記』（巻8）T51,911a「王故宮北有石柱。高數十尺。是無憂王。作地獄處。釋迦如來。涅槃之後。第一百年。有阿輸迦［唐言無憂。舊曰阿育。訛也。］王者。頻毘婆羅［唐言影堅。舊曰頻婆娑。訛也。］王之曾孫也。自王舍城。遷都波吒釐。築外郭。周於故城。」

68）『大唐西域記』（巻3）T51,886b「摩揭陀國無憂王。以如來涅槃之後。第一百年。命世君臨。威被殊俗。深信三寶。愛育四生。時有五百羅漢僧。五百凡夫僧。王所敬仰。供養無差。有凡夫僧。摩訶提婆［唐言大天。］闊達多智。幽求名實。潭思作論。理違聖教。凡有聞知。群從異議。」

69）『大唐西域記』（巻4）T51,889c「釋迦如來。涅槃之後。第三百年中。有迦多衍那［舊曰迦旃延。訛也。］論師者。於此製《發智論》焉。」

後 127 年頃で，シャカの入滅後第 6 世紀入りは後 133 年頃ということになろう。少なくとも以上のように見るのが現在のところ一番自然であろう。また，先述（2-1-1.）したシャカの入滅後「百十六年」についての內容は，その年にアショーカ王が在位していたことをしめすものということになろう。また先述（2-1-2.）したシャカの入滅後「百十年」に關する內容にアショーカ王の存在が確認されないのは，王名が記されていないだけということになろう。そして，先述（2-1-3.）したシャカの入滅後「百年」についての內容は，その年（あるいはその頃）にアショーカ王が卽位したことをしめすものということになろう。

ただし，先述（2-2-1. および 2-4-2.）したように，玄奘の傳えは，カニシュカ王をシャカの入滅後「四百年」（すなわち入滅後第 5 世紀）の人物とする。一方，カニシュカ王の在位年についてカニシュカ紀元第 23 年（すなわち在位第 23 年目）が確認されている[70]。そうであれば，カニシュカ王の在位第 7 年目頃にシャカの入滅後「五百年」入りするというのは，カニシュカ王の在位年數から見て少し早すぎるようにも思われる。あるいはカニシュカ王の在位第 7 年目頃よりもやや遲くに入滅後「五百年」入りした可能性もあるかもしれない。そうであれば，シャカの入滅年は前 368 年頃よりも少し後ということになってこよう。また，先述（2-1-3-2. および 2-1-3-3.）したアショーカ王の卽位がシャカの入滅後第 1 世紀（したがってシャカの入滅年は前 368 年頃以降）であったことを明らかにしめす『佛臨涅槃記法住經』の內容なども氣になるところである。けれども，正確なところは今この時點では不明であるから，ここではとりあえず，北傳（および關連情報）によれば，シャカの入滅年は前 368 年頃であったらしいと見られることを指摘するにとどめておこう。

第 3 章，南傳によるシャカの入滅年

3-1. 筆者假說

實は南傳によっても北傳と同じように，シャカの入滅年は前 368 年頃ということになりそうである。そう解釋される理由を本章で述べる。なお，南傳の情報は詳しいので，北傳と區別するためにアラビア數字表記を用いながら，數え年と經過年とをできる限り區別して檢討する。

南傳の根本文獻である『島史』およびそれを補足する『大史』をそのままに讀めば，

70） Falk, 2015, pp. 8-9, p. 111. なお，Falk 氏はカニシュカ王の在位は後 127 年頃から後 150 年頃とする。

シャカの入滅年は前 486 年頃となることは確かで，筆者も同感である。しかしながら，筆者は思うに，南傳においては歴史（あるいは本來の情報）が意圖的に改編されているらしく，改編前の情報に遡ると，シャカの入滅年は前 368 年頃とされていた可能性もありそうである。

では，具體的にどのような改編がなされているかといえば，次のようなことが考えられそうである。すなわち次は，筆者の假説である。

①『島史』の撰者の手元には，シャカの入滅後〈118 年が經過した 119 年目〉においてマヒンダがインドからスリランカに來島し上座部佛教を傳えたという情報があった。

②けれども，何らかの事情により，以上の 118 年が 236 年（すなわち 118 年を 2 倍した年數）に引き延ばされ，それにもとづき改編がおこなわれた。

③そして，本來はアショーカ王一人の時代の出來事であったものが，カーラーソーカ王とアショーカ王の二人の時代の出來事とされた。

3-2. 南傳をとらない從來の説

(3-2-1.）Westergaard 氏説：南傳について，『島史』の撰者が本來の情報を誤解して二人のアショーカ王（すなわちカーラーソーカ王とアショーカ王）を立ててしまったとし，シャカの入滅年については，結果として筆者とほぼ同様な結論を早くに導いた論考がある。それは N. L. Westergaard 氏によるものである[71]。同氏は，本來の情報は，シャカの入滅後「110 年」はアショーカ王の在位第 10 年目に當たることをしめすものであったと考えた。そして獨自の算定により，アショーカ王の卽位年は前 268 年と見た。同氏は以上により，アショーカ王の在位第 10 年目は前 259（＝268-9）年となるから，その 110 年前であるシャカの入滅年は前 369（＝259＋110）年となり，（筆者は思うに，おそらくはそれに誤差をあわせて）シャカの入滅年はおおよそ前 370 年から前 368 年の間と結論したようである。いずれにせよ，南傳は歴史が 2 倍に引き延ばされたものになっているらしいと Westergaard 氏は早くに感じたようである。この點は特筆に値しよう。

(3-2-2.）宇井伯壽氏説：南傳の問題點を詳しく明らかにし，南傳はシャカの入滅年を算定する上で採用しがたいと主張したのが，宇井伯壽氏である[72]。同氏の説は，シャカの

71） N. L. Westergaard : *Ueber den ältesten Zeitraum der indischen Geschichte mit Rücksicht auf die Litteratur : Ueber Buddha's Todesjahr und einige andere Zeitpunkte in der älteren Geschichte Indiens : zwei Abhandlungen. aus dem Dänischen übersetzt.* A. Gosohorsky's Buchh,（L. F. Maske）, 1862, pp. 122-123, pp. 126-128.

72） 宇井伯壽，1965 年，3-111 頁。

入滅年についての近年の最も有力な説（すなわち南傳を否定し北傳をとる説）の基礎となっている。同氏は，その批判的な分析の中で，『島史』はアショーカ王の卽位年はシャカの入滅後「218 年」と明記するが[73]，この 218 年というのは長すぎるとした（23 頁）。筆者は思うに，同氏がいうとおりであろう。ただし，同氏は，では 218 年という年次がどこからもたらされたものかについては，結局のところ説明がつかないとした（33-34 頁）。けれども，筆者は思うに，この點については『島史』および『大史』を別の視點から眺めてみると，あるいは 218 年の出所が見いだせそうである（後述 3-4.）。いずれにせよ，『島史』の內容が整いすぎていることに，換言すれば，改編が加えられていることに同氏は早くに氣づいたようである。したがって，同氏のように，南傳の內容は信じられないとして一蹴するのも一理あろう。けれども，以下において，筆者は，南傳のそのような問題點を，逆に『島史』の撰者の手元にあった本來の情報を推測するための材料として活用してみようと思う。そして得られる最終的な答えは，アショーカの卽位年はシャカの入滅後「百年」で，したがってシャカの入滅年は前 368 年頃となりそうである。

3-3. 南傳をとるべきことをしめす從來の說，塚本啓祥氏說

南傳について，最も體系的かつ詳細な研究の一つとしてあげられるのが，塚本啓祥氏による研究である[74]。同氏は，確證は見いだせないとし南北兩傳のうちどちらをとるべきか必ずしも立場を明らかにはしていないものの，基本的にはシャカの入滅年については南傳をとるべきであろうとする立場をしめしながら，次のような點などを主張している。なお，以下では表現を筆者の言葉に改めるので，正確なところは同氏の論書を直接に參照していただきたい。

①南傳においては，先にアショーカ王の卽位年がシャカの入滅後「218 年」と設定され，それにもとづきマガダ王統の記事が編纂されている。218 年は實際の王の統治年數の合計よりも長く感じられる（107 頁，151 頁）。筆者は思うに，以上の指摘には注意が拂われるべきであろう。なぜならば，次のようにも考えられるからである。先ずアショーカ王の卽位年がシャカの入滅後「218 年」であれば，小稿の「はじめに」で述べたとおりアショーカ王の卽位年は前 268 年頃とされるので，シャカの入滅年はその 218 年前したがって前 486（＝268＋218）年頃ということになる。けれども，實際の王の統治年數の合計が 218 年よりも短ければ，シャカの入滅年は前 486 年頃よりも後であることになる。

73） この「218 年」を南傳における編年體系の要 corner-stone となる情報として注目したのが，次である。Geiger, 1912, p. xxiii.

74） 塚本啓祥『初期佛教教團史の研究』（山喜房佛書林，1966 年）。

北傳では，シャカの入滅年は前 368 年頃よりも「少し後」である可能性があることは先述（2-6.）したとおりである。南傳でも前 486 年頃よりも後である可能性があることは，より正確な入滅年を考える時に重要になってこよう。

② 南傳がしめすシャカの入滅後「218 年」は，實證する他の資料を見いだし得ないので，編年史構成の確定的な論據となりえない（107 頁，151 頁）。筆者は思うに，同氏は宇井氏と同じく「218 年」という年次がどこからもたらされたものかについては，結局のところ説明がつかないと見ているようである。けれども，はたしてそうであろうか（後述 3-4.）。

③ 北傳のような短い編年史の存在を南傳の中に確認するのは困難である（82 頁）。筆者は思うに，確かに確認することは困難ではあるが，少なくとも存在する可能性なら見いだせそうである（後述 3-5.）。

④ 南傳によれば，アショーカ王の卽位（灌頂）年はシャカの〈入滅後「218 年」〉である（261 頁）。筆者は思うに，正確にはシャカの〈入滅後 218 年が經過した 219 年目〉であろう（先述 1-2-2-3.）。

⑤ 南傳によれば，シャカの入滅後「236 年」はアショーカ王の〈在位第 19（＝236-218＋1）年〉である（261 頁）。筆者は思うに，正確にはアショーカ王の〈在位第 17 年目あるいは第 18 年目〉であろう（先述 1-2-2-3. および表 2）。

⑥ 南傳がしめす第二結集の年は，シャカの〈入滅後「100 年」〉に當たる（82 頁）。筆者は思うに，しかしながら，第二結集（より正確には第二結集第 III 段階）はシャカの〈入滅後 118 年目頃〉と見るべきであろう（後述 3-4-2. および 4-1-3.）。

⑦〈南傳にいう Kālāsoka 王〉＝〈プラーナ文獻にいう Kākavarṇa 王〉である（79 頁）。筆者は思うに，おそらくはそのとおりであろう。ただし，確證は得られないので，Kālāsoka 王の事跡を直ちにそのまますべて Kākavarṇa 王の事跡とすることはできないであろう。

⑧いわゆるシシュナーガ朝について，プラーナ文獻は，Śiśunāga（＝Susunāga）王とその子である Kākavarṇa（＝Śakavarṇa）王を，Vimbisāra（＝Bimbisāra）王とその子である Ajātaśatru（＝Ajātasattu）王よりも前の時代に置く[75]。一方，南傳は，Bimbisāra 王とその子である Ajātasattu 王を，Susunāga 王とその子である Kālāsoka 王よりも前の時代に置く（表 12）。したがって，南傳によれば，Bimbisāra 王とその子である Ajātasattu 王は，Susunāga 王が立てたとされるシシュナーガ朝の王ではないことになる。以上に關しては，南傳の說をとるべきである（64 頁，72 頁，78-84 頁）。筆者は思うに，アショーカ王の卽位年がシャカの入滅後「218 年」であれば，それでよかろう。しかしながら，218 年ではな

75） F. E. Pargiter（ed.）: *The Purāṇa text of the dynasties of the Kali age / with introduction and notes.* London : Oxford University Press, 1913.

ければ，それぞれの王の在位（統治）年數から判斷するに，同氏のように見るのはむずかしくなろう（後述 3-5.）。

3-4. 南傳における 118 年問題

南傳においては，歴史（あるいは本來の情報）が意圖的に改編されているようである。先述（1-2-2-3.）したとおり，南傳によれば，シャカの〈入滅後 218 年が經過した 219 年目〉にアショーカ王は卽位したとされる。そうであれば，アショーカ王の卽位年は前 268 年頃とされるので，シャカの入滅年は前 487（＝268＋219）年頃あるいは從來の算定のように前 486（＝268＋218）年頃かといえば，實のところはそれほど單純ではなさそうである。南傳にもとづく從來の代表的な研究では，南傳が直接的にしめすこの〈入滅後「218 年」〉に着目し入滅年は前 486 年頃と結論される[76]。しかしながら，筆者は思うに，着目すべきは 218 年ではなく，むしろ先述（1-2-5.）した第三結集が閉會されたとされる〈入滅後 236 年目〉の方であろう。そして，236 年に關わる南傳の內容を分析するに，南傳では 118 年が何らかの意圖をもって 236 年（118 年を 2 倍した年數）に引き延ばされ，それにもとづき改編が行われているようである。ここでは以上のように考える理由を述べる。

（3-4-1.）ヴィジャヤの來島日：南傳によれば，スリランカの王國の建國者ヴィジャヤの來島日は，シャカの入滅日と同日であったとされるが，筆者は思うに，これは必ずや創作にちがいあるまい。この點は，南傳には改編がなされているところもあることをしめすものといえよう。先述（1-2-1.）を參照。

次によれば，シャカの入滅のまさにその日にヴィジャヤがインドからスリランカに來島したとされる。

◇『島史』IX. 21-22.「兩足尊正覺者の般涅槃の時にこのシーハバーフ Sīhabāhu の子の毘闍耶 Vijaya といへる刹帝利は，閻浮洲と呼ぶ［土地を］捨てゝ楞伽島 Laṅkādīpa に到著せり。最勝の佛陀は「かの刹帝利は王たるべし」と授記し給へり。[77]」

◇『大史』VI. 47.「彼毘闍耶と名づくる堅固慧の童子は，雙び列れる沙羅樹の間に於て，如來が入滅のために臥したまへる日に，楞伽島，銅掌國 Tambapaṇṇi に上陸したり。[78]」

76） たとえば次は，シャカの入滅年を前 486 年頃と見る。山崎元一，1989 年，167-176 頁。

77） Oldenberg : *The Dīpavaṃsa*, IX. 21-22 : At the time, when Sambuddha, highest of men, attained Parinibbâna, that son of Sīhabâhu, the prince called Vijaya, having left the land called Jambudīpa, landed on Laṅkâdīpa. It had been foretold by the most excellent Buddha, that that prince one day would be（its）king.

78） Geiger : *The Mahāvaṃsa*, VI. 47 : The prince named VIJAYA, the valiant, landed in Laṅkā, in the region called Tambapaṇṇi on the day that the Tathāgata lay down between the two↗

また次は，ヴイジャヤがインドから來島し年內に建國したことをしめすものであろう。

◇『島史』IV. 27.「時に世間の守護者［佛陀］の入涅槃後十六年，阿闍世 Ajātasattu の［治世］第二十四年，毘闍耶の［治世］第十六年，」

(3-4-2.）二つの結集：南傳によれば，シャカの入滅後 118 年目頃と 236（＝118 × 2）年目頃に結集があったらしいが，118 年が繰り返されているようであり，どうも氣になる。あるいはこれは改編の痕跡ではなかろうか。

次によれば，アショーカ王の在位第 17 年目に第三結集が閉會された時點は，シャカの入滅後 236 年目に當たる（先述 1-2-2-3.）。

◇『島史』VII. 37-59. 前掲（1-2-2-2.）。

◇『大史』V. 281. 前掲（1-2-2-2.）。

次によれば，第二結集の 118 年後に第三結集が開かれると豫見されたとされる。これは，裏返せば，第二結集は第三結集の 118 年前に開かれたことを意味するものである。そうであれば，第二結集は第三結集があったシャカの入滅後 236 年目頃（正確には先述（1-2-5-3.）したとおりシャカの入滅後 235 年目から 236 年目）の 118 年前すなわちシャカの入滅後 118（＝236-118）年目頃に開かれたことになろう。

◇『島史』V. 55-59.「［第二結集の時，長老等は次の如きことを豫見せり。］『當來百十八年には［該時僧伽の分裂を破斥するに］適はしき比丘沙門現はるべし。梵界より沒して，一切の眞言に通曉せる婆羅門種として人［界］中に生れん。［彼は］帝須 Tissa と稱し，通稱を目犍連子 Moggaliputta と呼ばるべし。…その時巴連弗 Pāṭaliputta に阿育王 Asoka と名づくる如法の國の增長者導師は王國を統治すべし』と。」

◇『大史』V. 98-104.「第二次の結集に於て彼の長老たちは未來を見渡しつゝ，この王［Asoka］の時に［佛の］敎に邪魔あることを識りたり。…一百十八年を過ぎて後，敎に邪魔生ぜん，…敎を興さんがために，大慧者帝須梵天は目犍連婆羅門の家にて託胎せん。」

ところで，Hermann Oldenberg 氏は，シャカの入滅後「100 年」に第二結集があり，その 118 年後に第三結集があったと考えたようである[79]。また塚本氏は，南傳によれば，シャカの入滅後「100 年」に第二結集があり，入滅後「236 年」に第三結集があったことになるとする[80]。しかしながら，筆者は思うに，第二結集と第三結集があった年次については，以上によれば，入滅後 118 年目頃と入滅後 236 年目頃と解釋されるので，兩氏

---

twinlike sāla-trees to pass into nibbāṇa.

79） ただし，後述（3-4-5.）する『島史』I. 25 についての解釋である。Oldenberg, 1879, p. 119.

80） 塚本啓祥，1966 年，81-82 頁，134-135 頁。

のように第二結集の年を直ちにシャカの入滅後「100 年」としてしまうのには問題があろう。ただし，入滅後 118 年目頃に開かれたと思われる結集は，正確には十事をよしとする者たちの追放が終了した後に開かれた第二結集第 III 段階に當たるものと見ることもできそうである（後述 4-1-3.）。そしてもしそうできれば，兩氏がいう第二結集はその前の段階（第二結集第 I 段階）に當たるものと見ることも可能であろうから，兩氏のように第二結集の年をシャカの入滅後「100 年」と見ても必ずしも誤りではないであろう。

(3-4-3.)《先の 118 年間》と《後の 118 年間》：南傳には，シャカの入滅後 118 年目と 119 年目との間および入滅後 236 年目と 237 年目との間に，歴史的に見て大きな斷層が認められる。すなわち，南傳は《先の 118 年間：シャカの入滅後 1 年目から入滅後 118 年目までの 118 年間》と《後の 118 年間：入滅後 119 年目から入滅後 236 年目までの 118 年間》の二つの 118 年間があったことをしめす（表 13）。あるいはこれも改編の痕跡ではなかろうか。

①《先の 118 年間》を確認するに，入滅後 118 年目頃に第二次結集が開かれていた時の王はカーラーソーカ王であるが，118 年目あるいは 119 年目のある時點において崩御（あるいは退位）したようである。

次によれば，カーラーソーカ王の在位第 10 年目にシャカの入滅後 100 年が經過したという。

◇『島史』IV. 44-47.「かの長老須那拘 Sonaka の滿四十歳の時に，迦羅阿育 Kālāsoka は十年と半ヶ月［治世し］…時に世尊の滅後百年を［經て］，毘舍離 Vesālī 所屬の跋耆子 Vajjiputta 等は毘舍離に於て，十事を宣言せり。…」

◇『大史』IV. 8.「かくて迦羅阿育王の卽位より十年目に正等覺者の般涅槃より一百年を過せり。」

次によれば，カーラーソーカ王の在位は 28 年間あったという。そうであれば，表 13 からも理解されるように，カーラーソーカ王は第二結集の閉會後早いうちに崩御（あるいは退位）したことになろう。この點は，カーラーソーカ王の崩御をもって，《先の 118 年間》が終わり，新たな時代すなわち《後の 118 年間》が始まったことをしめすものといえよう。なお，カーラーソーカ王の在位最終年すなわち卽位後 28 年目の期間がどれくらいあったかは不明である。

◇『大史』IV. 7.「その迦羅阿育［また］在位二十八年なり。」

② 《後の 118 年間》を確認するに，次によれば，《後の 118 年間》の始めの年から數えで 118 年目（すなわち南傳にいう〈シャカの入滅後 236 年目〉）に第三結集が閉會されたとされる（表 13 および先述 1-2-2-3.）。

◇『島史』VII. 37-59. 前揭（1-2-2-2.）。

◇『大史』V. 281. 前掲（1-2-2-2.）。

また次によれば，《後の 118 年間》の始めの年から數えで 119 年目（すなわち南傳にいうシャカの入滅後 237 年目）にマヒンダがインドから來島しスリランカに上座部佛教を傳えたとされる。これは，その時點からさらに新たな時代が始まったことを意味するものといえよう。なお，マヒンダの來島の年は，〈アショーカ王の在位第 18 年が經過した第 19 年目〉でかつ〈南傳にいうシャカの入滅後 236 年が經過した 237 年目〉であろう（表 13 および先述 1-2-3.）。

◇『島史』VII. 40-42.「異說の破斥者なる大慧目犍連子 Moggaliputta は，上座說を確固たらしめて第三結集を行へり。…弟子の摩哂陀 Mahinda は彼の親教師目犍連子の許に於て正法を學べり。」

◇『島史』XII. 41-44. 前掲（1-2-3.）。

◇『島史』XV. 71-73. 前掲（1-2-3.）。

（3-4-4.）二人のアショーカ王：南傳は，《先の 118 年間》の最終年次に在位していた王はカーラーソーカ王（「黑いアショーカ」を意味する）で，《後の 118 年間》の最終年次に在位していた王はアショーカ王であったとする。この名前の近似は，はたして偶然であろうか[81]。あるいはこれも改編の痕跡ではなかろうか。

もし南傳が正しければ，マガダ王國の王統繼承は，表 12 にしめすとおりで，父子あるいは兄弟といった繼承關係から，① Bimbisāra 王-Ajātasattu 王-Udayabhadda 王-[Anuruddha 王-Muṇḍa 王-Nāgadāsaka 王，② Susunāga 王-Kālāsoka 王-Kālāsoka 王の十子]，③ Nanda の九王，④ Candagutta 王-Bindusāra 王-Asoka 王，以上の四つの王朝が續いたと見ることができよう。しかしながら，Anuruddha 王から Kālāsoka 王の十子まではその存在あるいは繼承についての確證はない[82]。したがって，王統譜において，Kālāsoka 王もこの位置に意圖的に挿入された可能性があるのである。ただし，Kālāsoka 王は直ちには架空の人物とは言い切れないであろう。以上の王朝（あるいはグループ）の竝立あるいは鼎立の可能性なども檢討しておかなければならないであろう[83]。詳しくかつ正確なところは後考を待つしかないであろう。

また次では，「カーラーソーカ」であるべきところが「アショーカ」と表記されている。

81） すでに次に指摘がある。Westergaard, 1862, pp. 126-127.

82） すでに次に指摘がある。塚本啓祥「佛滅年代に關する問題點」（『印度學佛教學研究』8(2)，1960 年）598-601 頁，598-599 頁。

83） 中村元氏は，プラーナ聖典におけるマウリヤ王朝以後の年數記載は信用できるが，それ以前の時期については空想的要素がしのび込んでいる可能性が強いとする。參考にすべき意見であろう。中村元，1997 年，616-617 頁。

あるいはこれも改編の痕跡かもしれない。

◇『島史』V. 25.「時に修修那迦 Susunāga の子なる阿育 Asoka が王にして，［その］刹帝利は巴連弗 Pāṭaliputta の城市に於て統治せり。[84]」

（3-4-5.）『島史』の混亂：『島史』の內容には，シャカの入滅後 118 年目頃の結集と入滅後 236 年目頃の結集について混亂が見られる。次がそうで，シャカの入滅後第 4 月目に開かれた第一結集の 118 年後は，アショーカ王の在位中であり，（第二結集ではなく）第三結集が開かれるとシャカが豫見したというのである。あるいは單なる缺落による混亂かもしれないが，これも改編の痕跡である可能性があろう。あるいは Oldenberg 氏がいうように本來は第二結集の 118 年後に第三結集があったことを記す內容であったかもしれないが[85]，いずれにせよ 118 年に關して何かが意圖されているようにも感じられる。

◇『島史』I. 25-27.「般涅槃後四ヶ月にして，最初の結集はあるべし。それより百十八年後には第三結集あり，教［法］を弘布せんがために，この閻浮洲に威光を具する大功德の法阿育王とて名高き王あるべし。かの阿育王には賢者にして聞具足の楞伽島を改宗する摩哂陀なる子あるべし。」

（3-4-6.）南傳にいう「218 年」：南傳はシャカの入滅年からアショーカ王の卽位年までに 218 年あったことを明らかにしめすが，この間のスリランカにおける王統の繼承は五王のみであり，また律の資師相承も五師のみである。それでは 218 年は長すぎることは，宇井伯壽氏がすでに指摘するとおりであろう[86]。同氏は，五王の間は 100 年少し以上になるのみとする。筆者は思うに，そうであれば，この點も本來の情報（すなわち 100 年少し以上に相當する 118 年）を 2 倍に引き延ばした改編の痕跡と見ることもできよう。

3-5. 小結

以上により，南傳は史實をそのままに傳えているとは言い難く，本章の冒頭でしめした假說の如く，118 年あった歷史が意圖的に 2 倍に引き延ばされているように筆者には思われてならないのである。南傳にそのままにもとづけば，アショーカ王の卽位年はシャカの入滅後「218 年」（正確には 218 年が經過した 219 年目）となるが，一方，視點を變えれば，シャカの入滅後 119 年目から《後の 118 年間》が始まっていると見ることも可能であろう。すでに氣づかれているであろうが，表 13 からも理解されるとおり，この南傳に

84） Oldenberg : *The Dīpavaṃsa*, V. 25 : At that time Asoka, the son of Susunâga, was king ; that prince ruled in the town of Pâṭaliputta.

85） Oldenberg, 1879, p. 119.

86） 宇井伯壽，1965 年，17-34 頁，23 頁。

いうシャカの入滅後119年目をかりに〈1年目〉と見た場合，南傳にいうシャカの入滅後219年目は〈101年目〉に當たる。この《後の118年間》の〈101年目〉は，年次として第2章で見た北傳にいうアショーカ王の卽位年である〈シャカの入滅後「百年」（正確には100年が經過した101年目とも言い得る年次）〉と符合する[87]。この符合は定めし偶然ではあるまい。したがって，筆者は，北傳も南傳も實のところは，アショーカ王の卽位年はシャカの入滅後「百年」（したがってシャカの入滅年は前368年頃）とする歷史（あるいは同じ本來の情報）にもとづくものであろうと考えるのである。

第4章，南北兩傳にいう結集について

4-1. 南傳にいう第二結集と第三結集

南傳によれば，シャカが豫見した如く，マヒンダがスリランカに佛敎（正確には上座部正統派の敎義）を傳えたとされる。一方，次節（4-2.）で述べるとおり北傳を參考にすると，上座部正統派は，スリランカではなくカシュミールに移住したようである。したがって，必ずしも南傳にいうとおりではなかったようにも思われるが，南傳における結集についての內容は，基本的には北傳のものと符合するようである。この點を確認するために，先ずは南傳の內容から見てみよう。

南傳によれば，第二結集はシャカの入滅後「100年」に，第三結集はシャカの入滅後「236年」に開かれたとされる，と見るのが普通の解釋のようでもある[88]。しかしながら，筆者は思うに，第二結集は廣義にはおそらくはそうではなく，シャカの入滅後101年目（すなわちシャカの入滅後「百年」）から入滅後117年目（すなわち入滅後「百十六年」）までの一連の出來事を指すものであろう。というのは，南傳の內容は第二結集には以下で見るような三つの段階があったことをしめしているように解釋されるからである。

（4-1-1.）第二結集第I段階：『島史』によれば，シャカの入滅後「100年」（正確には100年が經過した101年目）に，ヴァッジ族の僧たちがヴァイシャーリーに集まり，いわゆる十事をよしと主張したとされる。なお，ヴァイシャーリーはパータリプトラからガンジス川を隔て北西に40キロほどの地であったらしい[89]。一方，北傳では，この第二結集第I段階は次節（4-2.）で見るとおり，さらにIa〈大天による五事の主張〉とIb〈ヴァッジ

87） この點は「諸佛典に記されたシャカ入滅後の年數は基本的には經年（經過年）によるものであろう」と筆者が考える根據の內の最も注目すべき例の一つである。

88） 次を參照。塚本啓祥，1966年，81-82頁。

89） *The Princeton Dictionary of Buddhism*, Pāṭaliputra ; Vaiśālī.

族の僧たちによる十事の主張〉の二つの段階に分けることができそうである。また北傳はIbをシャカの入滅後「百十年」の出來事とする（先述2-1-2.）。そうであれば，南北兩傳の內容を相關させるに，シャカの入滅後「100年」にそもそもの事の起こりである〈大天による五事の主張〉がなされ，その延長線上において入滅後「百十年」に〈ヴァッジ族の僧たちによる十事の主張〉がなされたと見てよいのではなかろうか。

◇『島史』IV. 44-48.「かの長老須那拘Sonakaの滿四十歲の時に，迦羅阿育Kālāsokaは十年と半ヶ月［治世し］…時に世尊の滅後百年を［經て］，毘舍離Vesālī所屬の跋耆子Vajjiputta等は毘舍離に於て，十事を宣言せり。…毘舍離に於て正覺者の般涅槃後百年に跋耆子等は十事を宣言せり。」

◇『島史』V. 16-19.「最初の百年を過ぎて第二の百年に達せし時，上座說に最上の大分裂は生ぜり。毘舍離の一萬二千の跋耆子等は集りて最上の都毘舍離に於て十事を宣言せり。」

（4-1-2.）第二結集第II段階：『島史』によれば，十事をよしとしない者（すなわち上座部正統派）がヴァイシャーリーに集まり，十事をよしとする者たちを追放したとされる。この第二結集第II段階の年次を直接的に記す資料は見あたらないが，次の第二結集第III段階の年次から推察するに，追放がおこなわれたのは〈シャカの入滅後116年目〉以前のことであろう。

◇『島史』V. 20-26.「彼等を破斥せんがために數多の佛陀の聲聞，一萬二千の勝者の子等は來集せり。…［彼等は］惡人等を破斥せんがために毘舍離に來集せり。…時に修修那迦の子なる阿育が王にして，［その］刹帝利は巴連弗の城市に於て統治せり。大神通力ある八人の長老等は彼を味方に得て，十事を破り，彼等惡人を驅逐せり。」

（4-1-3.）第二結集第III段階：①『島史』によれば，十事をよしとする者たちの追放が終了した後，上座部正統派はヴァイシャーリーにおいて七百人の阿羅漢を選び結集をおこなったとされる。先述（3-4-2.）したところを參考にすれば，第二結集第III段階と見なし得るこの結集は，シャカの入滅後118年目頃のことらしいが，より正確には〈シャカの入滅後116年目〉のある日に開會され八ヶ月間續き〈シャカの入滅後117年目〉のある日（11月末日以前）に閉會されたように思われる。というのは，先述（1-2-5-3.）したとおり，次におこなわれた第三結集が，南傳が直接的にしめす〈シャカの入滅後235年目〉したがって實のところは〈シャカの入滅後117（=235-118）年目で，インド曆で12月1日〉に，開會されたと見ることができるからである（表8，表13，表14）。ついでながら，以上にいう〈シャカの入滅後117年目〉は北傳にいう〈シャカの入滅後「百十六年」（すなわち116年が經過した117年目）に當たろう（先述2-1-1.）。おそらくは，實のところはこのように第二結集第III段階の終了後早いうちに繼續して第三結集が開會されたのであ

ろう。また，狭義には，この第二結集第 III 段階が第二結集と呼ばれているようにも思われる。

◇『島史』V. 27–29.「大神通力ある八人の長老等は悪比丘等を驅逐し了りて，悪説を破り，自説を淨めんがために比丘等は七百の阿羅漢を選び，最勝のものをとりて法の結集を行へり。この第二結集は最上の都毘舍離の重閣講堂に於て［行はれ］八ヶ月にして終了せり。」

② 『島史』によれば，追放（放逐）された者たちも獨自に結集をおこなったとされる。ここに大衆部が成立し，根本分裂が完了した。筆者は思うに，では根本分裂の始まりはいつと見るべきであろうか。あるいは〈大天による五事の主張〉がなされた時，あるいは〈ヴァッジ族の僧たちによる十事の主張〉がなされた時，あるいは〈『島史』にいう追放〉がおこなわれた時のいずれをとることも可能であろう。南傳によれば，第二結集はシャカの入滅後「100 年」に開かれたとも解釋し得るのは，おそらくはこの點に關わるものでもあろう。

◇『島史』V. 30–31.「上座等によりて放逐せられたる悪比丘跋耆子等は他の味方を得，非法を説く多數の人々一萬人は集りて法の結集を行へり。それ故にこの法の結集は大合誦 mahāsaṃgīti と呼ばるゝなり。」

（4–1–4.）第三結集：『島史』によれば，教法にたがう主張がなされたことにより，パータリプトラの阿育園精舍で第三結集が開會されたとされる。また，この時の結集の主催者であったモッガリプッタからマヒンダは上座部正統派の教義を學んだといわれる。また，先述（1–2–5–3.）したところによれば，第三結集は南傳にいう〈シャカの入滅後 235 年目〉すなわち《後の 118 年間》の〈117（＝235–118）年目で，インド暦で 12 月 1 日〉に開會され，南傳にいう〈シャカの入滅後 236 年目〉すなわち《後の 118 年間》の〈118（＝236–118）年目で，インド暦で 8 月末日〉に閉會されたとされるから，實のところは，第三結集は〈シャカの入滅後 117 年目で，インド暦で 12 月 1 日〉に開會され，〈シャカの入滅後 118 年目で，インド暦で 8 月末日〉に閉會されたと見ることもできよう（表 14）。

◇『島史』VII. 37–59.「［佛滅後］二百三十六年に達せし時，彼等六萬の比丘等は，阿育園 Asokārāma に住したりき。邪命士，その他種々の異教徒等は，教［法］を傷へり。［彼等は］全て黄衣を纏ひて，勝者の教［法］を傷へり。六通を具し大神通力のある群の上首なる目犍連子 Moggaliputta は，千比丘に圍繞せられて法の結集を行へり。異説の破斥者なる大慧目犍連子は，上座説を確固たらしめて第三結集を行へり。…弟子の摩哂陀 Mahinda は彼の親教師目犍連子の許に於て正法を學べり。…佛陀の教［法］を信ずる刹帝利大王法阿育 Dhammāsoka は，巴連弗城 Pāṭaliputta に於て統治せり。…この第三結集は，法王の建立せし阿育園精舍に於て行はれ，九ヶ月にして終了せり，と。」

◇『大史』V. 281.「斯くて一千人の比丘により，阿育王の保護によりて，この正法會誦は九ヶ月にして終りたり。王の［卽位］第十七年，彼仙士は年七十二歳，大自恣の日に會誦を終りたり。」

(4-1-5.）第三結集後：①『島史』によれば，〈アショーカ王の在位第 18 年が經過した第 19 年目〉で，南傳にいう〈シャカの入滅後 236 年が經過した 237 年目〉すなわち南傳にいう〈シャカの入滅後 119 年目〉をかりに〈1 年目〉と見た場合には〈119 年目〉に當たる年に（表 13），シャカが豫見したとおり，マヒンダがスリランカに來島し佛敎（すなわち上座部正統派の敎義）を傳えたとされる。

◇『島史』XV. 71-73.「［佛陀はその時］「二百三十六年を過ぎて名を摩哂陀といへる［長老が］敎［法］を［楞伽 Laṅkādīpa に］輝かすべし。…［と懸記し給へり］。」

◇『島史』XII. 41-43.「阿育 Asoka の灌頂より十八年を經て，帝須 Tissa の灌頂後滿七ヶ月，摩哂陀は［法藹］十二年にして，閻浮洲よりこゝに來到せり。」

②次によれば，マヒンダの渡島は，敎化のための派遣とされる。

◇『島史』VIII. 1-2.「先見の明ある目犍連子は天眼を以て，當來に於て邊境に敎［法］の樹立を見て，敎［法］を樹立せんが爲に，［また］衆生の證悟の爲に，己を第五とする末闡提 Majjhantika 及び他の長老等を邊境に遣はしたり。」

◇『島史』VIII. 13.「己を第五とする摩哂陀は最勝の楞伽島に赴きて敎［法］を確立し，多數の［人々を］纏より脫せしめたり。」

◇『島史』XII. 8-10.「大神通力ある多數の長老等は，最勝の阿育園に於て，楞伽の地に對する哀愍より，摩哂陀にかく告げたり。時は［來れり］。卿は楞伽島に敎［法］を樹立すべし。大功德人よ，卿は行きて最勝なる［楞伽の］島を改宗せしめよ。」

③『島史』によれば，マヒンダの渡島と同じ年に上座部にとって二度目の大分裂があったとされる。北傳の內容と相關させるに，これはおそらくはこの時に〈北傳にいうカシュミールに向かった上座部グループ〉と〈マヒンダのグループ（いわゆるスリランカ上座部すなわち分別說部）〉との分裂がとりあえず完了したことを傳えるものであろう。

◇『島史』VII. 44.「［佛滅後］第二百三十六年を過ぎて再び上座部に大分裂生ぜり。」

4-2. 北傳にいう結集

北傳には，第三結集を直接的に記す內容は見られない。しかしながら，以下のようにも解釋することが可能であろうから，南傳の內容と齟齬をきたすことはなさそうである。

(4-2-1.）第二結集第 Ia 段階：『婆沙論』によれば，パータリプトラで〈大天が上座部正統派の敎義にたがう五事の主張（五惡見）をなした〉ために，次のような爭議があったとされる。南傳の內容と相關させるに，これはおそらくはシャカの入滅後「百年」（正確に

は100年が經過した101年目）のことであろう。

◇『婆沙論』（巻99）「ここにおいて一晩中争議でもめて夜が明けてしまった。（争議の）群衆はますます大きくなった。町に住む一般の人々から大臣までが相次いで來たり加わり，誰も争議をおさめることはできなかった。王は（それを）聞いて自ら僧伽藍（すなわちパータリプトラにあった鶏園寺）へ出向いたところ，二つのグループはそれぞれ（正しいと思う頌を）暗誦した。王は聞き終わり，そして自らには疑わしく思われたので，大天に尋ねて言った。『どちらが誤りで，どちらが正しいか。我々は今どちらのグループによるべきなのか』と。大天は王に言った。『戒律を説く經典によれば，争議をしずめようと思えば，多い方の意見によるべし』と。王はそこで二つのグループの者たちを別々に立ち列ばせてみたところ，賢聖な者たちのグループ（すなわち上座部正統派）には長老は多かったが僧全體の數は少なかった。（一方）大天のグループには長老は少なかったが僧全體の數は多かった。王はそこで多い方にしたがった。（すなわち）大天のグループにしたがい，もう一方のグループ（すなわち上座部正統派）をきびしく叱りつけた。（それで）争議は（とりあえず）しずまり（王は）宮へ歸った。[90]」

なお，『婆沙論』には王名は記されていないが，内容から判斷するにアショーカ王と見てよいであろう（後述4-3.）。また，王が争議の決裁をおこなっている點，とくに王が上座部正統派の教義をよしとしなかったことには，注意が拂われるべきであろう。

（4-2-2.）第二結集第Ib段階：『婆沙論』によれば，パータリプトラでは争議が繼續した。次の『十誦律』の内容と南傳の内容（先述4-1-1.）とを相關させるに，シャカの入滅後「百十年」に，ヴァッジ族の僧たちがヴァイシャーリーで十事をよしと主張したと見ることもできよう。

◇『婆沙論』（巻99）「この時，鶏園においては，争議はいまだ終わってはいなかった。後に異なる主張［が出された］により，…。[91]」

◇『十誦律』（巻60）前掲(2-1-2.)。

（4-2-3.）第二結集第II段階：南傳の内容と相關させるに，次の内容は，シャカの入滅後「百十六年」（正確には116年が經過した117年目）よりも前（すなわち〈シャカの入滅後116年目〉以前）に，一方のグループ（上座部正統派の者たち）が他の一方のグループ（十事をよし

90）『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻99）T27,511c「於是竟夜。鬪諍紛然。乃至終朝。朋黨轉盛。城中士庶。乃至大臣。相次來和。皆不能息。王聞自出。詣僧伽藍。於是兩朋。各執己誦。時王聞已。亦自生疑。尋白大天。孰非誰是。我等今者。當寄何朋。大天白王。戒經中說。若欲滅諍。依多人語。王遂令僧。兩朋別住。賢聖朋內。耆年雖多。而僧數少。大天朋內。耆年雖少。而眾數多。王遂從多。依大天眾。訶伏餘眾。事畢還宮。」

91）『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻99）T27,511c「爾時鶏園。諍猶未息。後隨異見。…」

とする者たち）を追放したことを傳えるものであろう。

◇『婆沙論』（巻 99）「ついに二部に分裂した。[92]」

（4-2-4.）第二結集第 III 段階：次によれば，シャカの入滅後「百十六年」に，上座部と大衆部の二つの部派が成立した。ここに根本分裂が完了した。南傳の內容と相關させるに，先述（4-1-3.）したように，第二結集第 III 段階と見なし得るこの結集は〈シャカの入滅後 116 年目〉のある日に開會され八ヶ月間續き〈シャカの入滅後 117 年目〉のある日（インド暦で 11 月末日以前）に閉會されたのであろう（表 14）。

◇『婆沙論』（巻 99）「一つ目のグループは上座部と言い，二つ目のグループは大衆部と言った。[93]」

◇『部執異論』（巻 1）前掲（2-1-1-1.）。

（4-2-5.）第三結集。次によれば，根本分裂の完了後，上座部（文脈から判斷するに上座部正統派とも見なしうるグループ）はカシュミールへ移住したとされる。南傳の內容と相關させるに，根本分裂の完了後，先述（4-1-4.）したように，〈シャカの入滅後 117 年目で，インド暦で 12 月 1 日〉から〈シャカの入滅後 118 年目で，インド暦で 8 月末日〉まで，上座部內においてカシュミールへの移住などについて爭議があったのであろう（表 14）。南傳にいう第三結集は，當時の狀況から推察するに，その時にマヒンダのグループがカシュミールへの移住に反對したことなどにも關わるものであったであろう。筆者は思うに，おそらくは第三結集はマヒンダのグループ（すなわち後の分別說部）がカシュミールへの移住を決めたグループとは決別し，自らのグループの體制を確立するために，自らのグループ內でおこなったものであろう。なお，次によれば，アショーカ王は初めは大衆部を支持し上座部を迫害しようとしたが，後に考えを改めたとされる。注意が拂われるべき內容であろう。

◇『婆沙論』（巻 99）「その時その頃，多くの賢聖な者たちは，多くの他の者たちがしたがわないことをしったので，すぐに鷄園を立ち去り，他所へ行こうとしたところ，王の家來はそれを聞きつけ，速やかに王に報告した。王は（それを）聞いて怒ってしまい，直ちに家來に命令して言った。『そやつら全員をガンジス川の邊に引っ張って行き，壞れた船に乘せ，流れに突き落とし，そうして，そやつ等が聖人であるのか凡人であるのか明らかにせよ。（本當に聖人であれば助かろう。）』と。家來は王の命令にしたがい，すぐにそうしようとした。その時，多くの賢聖な者たちは，それぞれ神通の奇跡を起こし，まるでシャカのように雁の王の如く天空に舞い上がり去って行った。また神通力を用いて，共

92）『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻 99）T27,511c「遂分二部。」

93）『阿毘達磨大毘婆沙論』（巻 99）T27,511c「一上座部。二大眾部。」

に鷄園を去ったものの未だ神通力をもたないために船中に殘る者たちを助け，多くの神變の奇跡を現して，（その者たちを）様々な姿に變えたので，（それでその者たちも）次々に天空に舞い上がり，西北を目指して飛び去って行った。王はそれを聞き，深く恥じて後悔し，もだえ苦しみ卒倒した。（そして）水を掛けられて，それでやっと意識を取り戻した。（王は）すぐに使者を派遣し彼らが赴いたところを捜させた。使者が戻り（彼らが）カシュミール國にいることをしった。そして（彼らにパータリプトラに）戻るよう強く求めたが，彼らは皆，王の求めにしたがわなかった。それで王はすべてをあきらめ（改心し），カシュミール國に，僧伽藍（寺院）を造り，賢聖な者たちを住まわせた。（彼らが）先（にいたパータリプトラの寺院）を參考にして様々なものを作り，僧伽藍の號をなすには鷄園などとし，その數は五百に及んだ。さらには使者を派遣して，多くの珍寶を布施し，日々の用具をこしらえさせては屆けさせた。これより以降，カシュミール國には賢聖な者が多く住み，佛法を守り，物を受け繼ぎ，今においてもなお盛んである。[94]」

ついでながら，以上によれば，上座部の者たちはカシュミールに向かって「雁の王の如く天空に舞い上がり去って行った」とされるが，マヒンダのグループ（分別說部）によるスリランカへの渡島も同様に傳えられている。

◇『島史』XII. 36.「恰も白鳥の王の空中を［飛翔するが］如くに閻浮洲より飛び去りき。長老等はかくの如く［空中を］飛びて，山中の最（眉沙迦山 Missaka）に降臨せり。」

4-3. 小結

南北兩傳にいう結集については，以上のように解釋することも可能であろう。したがって，實のところは，南北兩傳の內容は基本的には符合するものと見てよいであろう。

では，南傳が 118 年を 2 倍したのはなぜであろうか。筆者は思うに，『島史』が成立するまでに傳えられてきた說との矛盾を最小限におさえつつ，自派の正統性を明快に主張するために，そうしたのではなかろうか。もし本來のままに 118 年をとれば，カシュミールに移住したグループとの違いは小さくなり，どちらが上座部正統派であるかわかりにくくなったであろう。かといって，まったくの創作であれば，それまでに傳わって

94）『阿毘達磨大毘婆沙論』（卷 99）T27,511c-512a「時諸賢聖。知眾乖違。便捨鷄園。欲往他處。諸臣聞已。遂速白王。王聞既瞋。便敕臣曰。宜皆引至。殑伽河邊。載以破船。中流墜溺。卽驗斯輩。是聖是凡。臣奉王言。便將驗試。時諸賢聖。各起神通。猶如雁王。陵虛而往。復以神力。攝取船中。同捨鷄園。未得通者。現諸神變。作種種形相。次乘空西北而去。王聞見已。深生愧悔。悶絕躃地。水灑乃蘇。速卽遣人。尋其所趣。使還知在。迦濕彌羅。復固請還。僧皆辭命。王遂總捨。迦濕彌羅國。造僧伽藍。安置賢聖眾。隨先所變。作種種形。卽以摽題。僧伽藍號。謂鷄園等。數有五百。復遣使人。多齎珍寶。營辦什物。而供養之。由是爾來。此國多有。諸賢聖眾。任持佛法。相傳制造。于今猶盛。」

いた説と矛盾するところが多くなったであろう。以上のような問題が生じるのを避けるために，そうしたのではなかろうか。また，憶測ながら，クシャーナ朝の大王であった後2世紀のカニシュカ I 世と後3世紀のカニシュカ II 世およびカニシュカ III 世に關する情報の混亂あるいは誤解も，南北兩傳に差異を生じさせた理由の一つとしてあげられるかもしれない[95]。詳しくは後考にゆだねたい。

また，第二結集に關して，律書にアショーカ王の名が記されていないことを理由に，第二結集はアショーカ王の時代の出來事ではなかろうとする解釋がある[96]。たとえば，塚本氏は「第二結集が Maurya の Dharmāśoka の治世に起ったのであるならば，律の傳承者が Aśoka の名を知らないはずはない。律の傳承の凡てが，王名を傳えなかったのは，恐らくその王が佛教に關する所少なく，その名を保存するに價しなかったためであろう」とする。筆者は思うに，同氏の解釋は一理あろう。しかしながら，あるいは實のところはその正反對で，その王が佛教に關する所あまりにも大きく，その名をできる限り保存しない方がよいと判斷されたためと見ることもできよう。『婆沙論』の內容（4-2-1. および 4-2-5.）によれば，その王は第二結集に關わり上座部正統派をきびしく叱りつけたばかりではなく，さらにはガンジス川に突き落とすといった殘忍な方法で迫害しようとまでしたとされる。あるいは實際に迫害した可能性もあろう[97]。けれども，王は後に改心している。そうであれば，アショーカ王が最終的に殘した偉大な業績から判斷し，暗い過去のことは蒸し返さない方がよいとされ，第二結集についての話の中に王名は殘されなかったと解釋することもできよう。したがって，本章で分析した『婆沙論』の內容は第二結集とその後におけるアショーカ王に關わる話と見ておいてよいであろう。

お　わ　り　に

以上小稿では，先ずは準備として，シャカの入滅日については，インド暦で2月末日（正確には〈吠舍佉月の後半十五日すなわち白分十五日〉）あるいは8月22日（正確には〈迦剌底迦月の後半八日すなわち白分八日〉）とする二つの說があるが，二者擇一するのであれば，Fleet 氏が主張するように，8月22日とする說一切有部による說をとるべきであろうことを述べた。

95）それぞれのカニシュカ王については，たとえば次を參照。Falk, 2015, p. 9.

96）塚本啓祥，1966年，35頁。Bareau, 1953, p. 42. 山崎元一，1982年，269頁。

97）筆者は思うに，いわゆる根本分裂が生じた大きな原因の一つは，あるいはアショーカ王にあったということもできるのではなかろうか。

そして，唐の玄奘の傳えは正しいと假定した上で，シャカの入滅年とアショーカ王の卽位年およびカニシュカ王の卽位年に關する情報を相關分析しながら初步的な考察をおこない，シャカの入滅年の算定をこころみた。

そして，北傳（および關連情報）によれば，①〈シャカの入滅年は前 368 年頃〉であったらしいこと，②〈アショーカ王の卽位年は前 268 年頃〉とされるが，それは〈シャカの入滅後「百年」（正確には 100 年が經過した 101 年目）〉であったらしいこと，③〈カニシュカ王の卽位年は後 127 年頃〉とされるが，そのとおりであったらしいこと，④〈シャカの入滅後第 6 世紀入りは後 133 年頃〉であったらしいことなどをしめした。

一方，南傳については，從來の說では南傳の根本文獻である『島史』が明記する〈アショーカ王の卽位年はシャカの入滅後 218 年〉に着目し議論がおこなわれているが，着目すべきはむしろ〈マヒンダがスリランカに來島し上座部佛敎を傳えたとされる年の一年前〉で〈第三結集が閉會された年〉である〈シャカの入滅後 236 年〉であろうことを指摘した。そして，南傳においては〈シャカの入滅後 118 年〉の歷史が意圖的に 236 年（すなわち 118 年を 2 倍した年數）に引き延ばされ，それにもとづき改編がおこなわれているらしいことをしめした。また，從來の硏究では〈第二結集はシャカの入滅後 100 年〉におこなわれたとされるが，〈シャカの入滅後 116 年目〉に開會され〈シャカの入滅後 117 年目（すなわち北傳にいうシャカの入滅後「百十六年」に當たる年）〉に閉會された可能性があることを指摘した。また，以上を參考に南傳がもとづいたと思われる本來の情報に遡れば，南傳の內容は北傳の內容に基本的には符合するらしいことをしめした。

筆者は思うに，北傳も南傳も實のところはともに〈アショーカ王の卽位年はシャカの入滅後「百年」（正確には 100 年が經過した 101 年目）〉とする歷史（あるいは本來の情報）にもとづいたものであろう。したがって，〈アショーカ王の卽位年は前 268 年頃〉とされるので，それにしたがえば，小稿の「はじめに」で述べたように，〈シャカの入滅年は前 368 年頃〉ということになろう。また，アショーカ王の卽位の時點がシャカの入滅後第 1 世紀（したがってシャカの入滅年は前 368 年頃以降）であったことを明らかにしめす『佛臨涅槃記法住經』の內容のほか（2-1-3-2. および 2-1-3-3.），カニシュカ王をシャカの入滅後「四百年」（すなわち入滅後第 5 世紀）の人物とする玄奘の傳え（2-6.），南傳にいうマガダ王の統治年數合計は實際よりも長く感じられるとする塚本啓祥氏の說（3-3-①.）などから判斷するに，シャカの入滅年は前 368 年頃よりも少し後であった可能性もありそうである[98]。

98） シャカの入滅年をアショーカ王の卽位年のおおよそ 80 年前から 130 年前の間と見る次も參考になるかもしれない（p. 286）。ただし，次は北傳は信じられないとする（p. 285）。Heinz↗

いずれにせよ小稿で議論したところは，宇井伯壽氏が提起し，中村元氏が修正補強し，平川彰氏によって支持された〈シャカの入滅年は前 383 年頃〉とする説，Hermann Oldenberg 氏による〈第二結集はシャカの入滅後 100 年〉とする説，Wilhelm Geiger 氏による〈南傳を考察する上での要となるのはアショーカ王が卽位したとされるシャカの入滅後 218 年〉とする説などとは異なる解釋が成立する可能性があることをしめすものである。そうであるから，中村氏は「現在では，文獻上の證據はいちおう調べ盡くされている[99]」とするが，シャカの入滅年については，必ずしもそうとは言い切れないように思われる。實證學である考古學的研究が期待されるのはもちろんであるが，さらなる文獻學的研究の展開も必要であろう[100]。

主要參考文獻など

宇井伯壽「佛滅年代論」(『印度哲學研究第二』，岩波書店，1965 年)，3-111 頁。
宇井伯壽「阿育王刻文」(『印度哲學研究第四』，岩波書店，1990 年)，245-337 頁。
小野淸「二十八宿と獸帶との想定及び相傳に就て」(『天文月報』第 10 卷第 6 號，1917 年)，28-31 頁。
木村泰賢『阿毘達磨論の研究』木村泰賢全集第 4 卷（大法輪閣，2004 年)。
桑山正進「貴霜丘就却の歿年」(『東方學報』92，2017 年)，77-134 頁。
總合佛敎大辭典編集委員會（編）『總合佛敎大辭典』(法藏館，2005 年)。
高田修『佛像の起源』(岩波書店，1967 年)。
立花俊道（譯）『大王統史』南傳大藏經第 60 卷（大藏出版株式會社，1939 年)。
塚本啓祥「佛滅年代に關する問題點」(『印度學佛敎學研究』8(2)，1960 年）598-601 頁。
塚本啓祥「佛滅年代の資料」(『宗敎研究』163，1960 年，353-387 頁。
塚本啓祥『初期佛敎敎團史の研究』(山喜房佛書林，1966 年)。
中村元「マウリヤ王朝ならびにゴータマ・ブッダの年代について」(『インド史 II』中村元選集[決定版]第 6 卷，春秋社，1997 年)，581-619 頁。

Bechert : 'The Date of the Buddha', in : Heinz Bechert（ed.）*op. cit.*, 1995, pp. 253-286.

99） 中村元，1997 年，617 頁。

100） Pierre H. L. Eggermont 氏によるシャカの入滅年〈前 368 年〉説に關する檢證は，その作業の一つとされるべきであろう。次にまとめられた同氏の研究の成果を參照。Siglinde Dietz : *op. cit.*, 1995, pp. 39-105, pp. 97-104. また，『島史』IV. 44-47. および『大史』IV. 8. に記された〈カーラーソーカ王の在位第 10 年目にシャカの入滅後 100 年が經過した〉とする內容や，『島史』VI. 21-22 および『大史』V. 22. に記された〈アショーカ王は灌頂の四年前にすでに何らかの形で卽位していた〉らしいことをしめす內容も檢討する必要があろう。また，宮本亮一氏が指摘するように，カニシュカ王に關する〈後 127 年頃〉の情報の扱いにも注意を拂う必要が出てこよう。宮本亮一『バクトリア史研究』(龍谷大學，博士（文學)，34316 甲第 191 號，2014 年)，76 頁。いずれにせよ，證據は調べ盡くされているとは，いまだいえないであろう。

中村元［ほか］編『岩波佛教辭典』第 2 版（岩波書店，2002 年）。
干潟龍祥「インド佛教重要事項年代考〔但し五世紀迄〕」（鈴木學術財團『研究年報』12/13, 1975/1976 年），1–12 頁。
干潟龍祥「シャカムニの生存年代」（『日本學士院紀要』36(3)，1980 年），187–202 頁。
平川彰『インド佛教史』上（春秋社，2011 年）。
平松友嗣（譯）『島王統史』南傳大藏經第 60 巻（大藏出版株式會社，1939 年）。
水谷眞成（譯）『大唐西域記』中國古典文學大系第 22 巻（平凡社，1971 年）。
水野弘元「阿育王時代に部派は存在していたか」（『印度學佛教學研究』6(2)，1958 年），395–402 頁。
宮本亮一『バクトリア史研究』（龍谷大學，博士(文學)，34316 甲第 191 號，2014 年）。
『望月佛教大辭典』，世界聖典刊行協會，1974 年–。
村上眞完，及川眞介『（佛のことば註：パラマッタ・ジョーティカー研究）佛と聖典の傳承』（春秋社，2009 年），255–274 頁。
山崎元一「付章：佛滅年の再檢討」（『アショーカ王とその時代：インド古代史の展開とアショーカ王』，春秋社，1982 年），257–282 頁。
山崎元一「佛滅年代について」（『東洋學術研究』23(1)，1984 年），8–23 頁。
山崎元一「佛滅年代シンポジウムに參加して」（『東方學』第 77 輯，1989 年），167–176 頁。
矢野道雄『占星術師たちのインド』中公新書 1084（中央公論社，1992 年）。
Andre Bareau : 'La Date du Nirvana'. in : *Journal Asiatique*, T. 241, 1953, pp. 27–62.
Heinz Bechert（ed.）: *When did the Buddha live? : the controversy on the dating of the historical Buddha : selected papers based on a symposium held under the auspices of the Academy of Sciences in Göttingen*. Delhi, India : Sri Satguru Publications, 1995.
Heinz Bechert : 'The Date of the Buddha'. in : Heinz Bechert（ed.）*op. cit.*, 1995, pp. 253–286.
Robert Bracey : 'The Date of Kanishka since 1960'. in : *Indian Historical Review* 44(1), 2017, pp. 21–61.
Siglinde Dietz : 'The Dating of the Historical Buddha in the History of Western Scholarship up to 1980'. in : Heinz Bechert（ed.）*op. cit.*, 1995, pp. 39–105.
Pierre H. L. Eggermont : *The chronology of the reign of Asoka Moriya : a comparison of the data of the Asoka inscriptions and the data of the tradition*, Leiden. – PhD thesis Leiden, 1956.
Pierre H. L. Eggermont : 'New notes on Aśoka and his successors（part 1）'. in : *Persica* 2, 1966, pp. 27–70 ; '（part 2）'. in : *Persica* 4, 1969, pp. 77–120 ; '（part 3）'. in : *Persica* 5, 1971, pp. 69–102 ; '（part 4）'. in : *Persica* 8, 1979, pp. 55–93.
Harry Falk : 'The Yuga of Sphujiddhvaja and the Era of the Kuṣṣânṇas'. in : *Silk Road Art and Archaeology*, Vol. 7, 2001, pp. 121–136.
Harry Falk : 'The Kaniṣṣka Era in Gupta Records'. in : *Silk Road Art and Archaeology*, Vol. 10, 2004, pp. 167–176.
Harry Falk : 'Ancient Indian Eras : An Overview'. in : *Bulletin of the Asia Institute*, Vol. 21, 2007, pp. 131–145.
Harry Falk（ed.）: *Kushan Histories : Literary Sources and Selected Papers from a Symposium at Berlin, December 5 to 7, 2013*, Bremen, 2015.
J. F. Fleet : 'The Day on Which Buddha Died.' in : *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1909, pp. 1–34.
Wilhelm Geiger（trans.）: *The Mahāvaṃsa, or, the great chronicle of Ceylon*. London : Published for the Pali Text Society by Oxford University Press, 1912.

Hermann Oldenberg（ed. & trans.）: *The Dīpavaṃsa : an ancient Buddhist historical record*. London : Williams and Norgate, 1879.

F. E. Pargiter（ed.）: *The Purāṇa text of the dynasties of the Kali age / with introduction and notes*. London : Oxford University Press, 1913.

E. J. Thomas : 'Theravādin and Sarvāstivādin Dates of the Nirvāṇa.' in : *B. C. Law Volume* Part II. Poona, 1946, pp. 18–22.

The Princeton Dictionary of Buddhism, Princeton University Press, 2014.

Benjamin Walker : *Hindu world : An encyclopedic survey of Hinduism v. 1*. New Delhi : Munshiram Manoharlal, 1983, pp. 195–198, Calendar.

N. L. Westergaard : *Ueber den ältesten Zeitraum der indischen Geschichte mit Rücksicht auf die Litteratur : Ueber Buddha's Todesjahr und einige andere Zeitpunkte in der älteren Geschichte Indiens : zwei Abhandlungen. aus dem Dänischen übersetzt*. A. Gosohorsky's Buchh,（L. F. Maske）, 1862.

データベース：CBETA。なお，小稿ではリズムを優先し句讀を改めたところもある。

後　記

小稿は，2019 年 3 月 12 日に京都大學人文科學研究所で「龍門北朝窟の造像と造像記」共同研究班（班長：稲本泰生教授）と共催した國際研究ミーティング「初期佛教の學際的な研究」の場において筆者が發表させていただいた個人研究の內容を發展させたものである。研究ミーティングを實施するにあたり岡村秀典教授にひとかたならぬお世話になった。また小稿作成にあたり，船山徹教授ほか多くの方々からご助言やご知見をご提供いただいた。高橋早紀子氏，藤井淳氏ほかには資料收集においてご協力いただいた。ここに記して謝意を申し上げたい。

表１　シャカ入滅後世紀

	入滅年												
入滅が前384年なら						127							…
	前384	前284	前184	前84	17	117	217	317	417	517	617	717	…
入滅が前368年なら					**127**								…
	前368	前268	前168	前68	33	133	233	333	433	533	633	733	…
入滅後世紀	1世紀	2世紀	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	…

表２　南傳シャカ入滅後年次

カーラーソーカ王即位後年次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
南伝・シャカ入滅後年次	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	

カーラーソーカ王即位後年次		16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	…	…
南伝・シャカ入滅後年次	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	…	…	

アショーカ王即位後年次		(28)	…				1	2	3	4	5	6	7	8	9	
南伝・シャカ入滅後年次	(118)	…			…	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228

アショーカ王即位後年次	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
南伝・シャカ入滅後年次		229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243

アショーカ王即位後年次	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37			
南伝・シャカ入滅後年次		244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	…	…

表３　アショーカ王即位月とデーヴァーナンピヤ王即位月とマヒンダ來島月

	アショーカ王即位月	〈→〉デーヴァーナンピヤ王即位月	〈→〉マヒンダ來島月
可能性１	『島史』暦月名1月か2月か3月	〈第6月目か第7月目〉『島史』暦月名8月	〈第8月目〉『島史』暦月名3月（3月末日頃）
可能性２	（『島史』）暦月名2月か3月か4月	〈第6月目か第7月目〉『大史』暦月名9月16日	〈第7月目〉『大史』暦月名3月（3月末日頃）
可能性３	『島史』季節1月か2月か3月か4月	〈第6月目か第7月目〉『島史』季節8月か9月	〈第8月目〉『島史』季節4月（夏の最終の月）
可能性４	『島史』季節3月か4月か5月か6月	〈第6月目か第7月目〉『島史』季節10月か11月	〈第8月目〉『島史』季節6月（夏の最終の月）

表４　デーヴァーナンピヤ王即位月次とマヒンダ來島月

4-1. デーヴァーナンピヤ王即位月次			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
インド暦月次		7	8	9	10	11	12	1	2	3＊	4	5	6	7	8	9		
4-2. デーヴァーナンピヤ王即位月次				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
インド暦月次		7	8	9	10	11	12	1	2	3＊	4	5	6	7	8	9		
4-3. デーヴァーナンピヤ王即位月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12					
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
インド暦月次	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9				
4-4. デーヴァーナンピヤ王即位月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12					
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
インド暦月次	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			

表５　アショーカ王即位月次とデーヴァーナンピヤ王即位月

5-1. アショーカ王即位月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インド暦月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	

5-2. アショーカ王即位月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インド暦月次		2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	

5-3. アショーカ王即位月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インド暦月次		3	4	5	6	7	8	9	10	12	1	2	3	4	5	6	

5-4. アショーカ王即位月次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12				
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
インド暦月次		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	

表６　シャカ入滅日〈２月末日〉説

アショーカ王即位月	1月か2月				1月か2月				1月か2月				1月か2月				1月か2月
アショーカ王在位年次		16				17				18				19			
							7月8月						X	3月			
シャカ入滅後年次	234年			235年				236年				237年				238年	
シャカ入滅日			2月末日				2月末日				2月末日				2月末日		

表７　シャカ入滅日〈８月 22 日〉説、第三結集閉會は８月末日、マヒンダ來島は３月末日頃

アショーカ王即位月	1月2月3月	1月2月3月	1月2月3月	1月2月3月	1月2月3月
アショーカ王在位年次	16	17	18	19	
		7月末日 8月末日		3月末日頃	
シャカ入滅後年次	234年	235年	236年	237年	238年
シャカ入滅日	8月22日	8月22日	8月22日	8月22日	

表８　第三結集開催期間

第三結集月次						一ヶ月目	二ヶ月目	三ヶ月目	四ヶ月目	五ヶ月目	六ヶ月目	七ヶ月目	八ヶ月目	九ヶ月目		
インド暦月次	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
南伝・シャカの入滅後月次	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	
南伝・シャカの入滅後年次	234年		235年												236年	

表９　シャカの入滅後「五百年」入りの年

	入滅年												
即位が入滅後「百十六年」なら													…
	前384	前284	前184	前84	**17**	**117**	217	317	417	517	617	717	…
即位が入滅後「百十年」なら													…
	前378	前278	前178	前78	**23**	**123**	223	323	423	523	623	723	…
即位が入滅後「百年」なら													…
	前368	前268	前168	前68	**33**	**133**	233	333	433	533	633	733	…

シャカ入滅後世紀	1世紀	2世紀	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀		…
玄奘の伝えにいう百年次可能性1	一百年	二百年	三百年	四百年	五百年	六百年	七百年	八百年	九百年	千年	千百年		…
玄奘の伝えにいう百年次可能性2		一百年	二百年	三百年	四百年	五百年	六百年	七百年	八百年	九百年	千年		…

表 10　後 127 年はシャカの入滅後「五百年」入りの前

	入滅年												
即位が入滅後「百十六年」なら													…
	前384	前284	前184	前84	17	117	217	317	417	517	617	717	…
即位が入滅後「百十年」なら													…
	前378	前278	前178	前78	23	123	223	323	423	523	623	723	…
即位が入滅後「百年」なら					127								…
	前368	前268	前168	前68	33	**133**	233	333	433	533	633	733	…

シャカ入滅後世紀	1世紀	2世紀	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀		…
玄奘の伝えにいう百年次可能性1	一百年	二百年	三百年	四百年	五百年	六百年	七百年	八百年	九百年	千年	千百年		…
玄奘の伝えにいう百年次可能性2		一百年	二百年	三百年	四百年	五百年	六百年	七百年	八百年	九百年	千年		…

表 11　北傳および關連資料による相關

即位が入滅後「百年」					127								…
	前368	前268	前168	前68	33	133	233	333	433	533	633	733	…

シャカ入滅後世紀	1世紀	2世紀	3世紀	4世紀	5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀		…
玄奘の伝えにいう百年次		一百年	二百年	三百年	四百年	五百年	六百年	七百年	八百年	九百年	千年		…

表 12　『島史』および『大史』マガダ王統譜（シャカの入滅年からアショーカ王の灌頂即位年まで 218 年間）
ただし，シャカの入滅年は Ajātasattu の在位第 8 年に當たる（(32)－8＝24）

『島史』	王名	在位年数	『大史』	王名	在位年数
(III.59)	(Bimbisāra)	(52)	(II.29-30)	(Bimbisāra)	(52)
III.60-61	Ajātasattu	24/(32)	II.31-32	Ajātasattu	24/(32)
V.97	Udayabhadda	16	IV.1	Udayabhadda	16
			IV.2-3	Anuruddha & Muṇḍa	8
XI.10-11	Nāgadāsa	21-24?	IV.4	Nāgadāsaka	24
V.98	Susunāga	10	IV.6	Susunāga	18
IV.44; V.25,80	Kālāsoka	(?)	IV.7	Kālāsoka	28
V.99	Kālāsokaの十子	22	V.14	Kālāsokaの十子	22
			V.15	Nandaの九王	22
V.100	Candagutta	24	V.18	Candagutta	24
V.101	Bindusāra	(?)	V.18	Bindusāra	28
VI.21-22	Asoka	灌頂即位まで4		Asoka	灌頂即位まで4
VI.1		合計　218	V.21		合計　218

表 13　南傳シャカ入滅後年次

カーラーソーカ王即位後年次		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
南伝・シャカ入滅後年次	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	

カーラーソーカ王即位後年次		16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	…	…
南伝・シャカ入滅後年次	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	…	…	

共通暦紀元前		368	…			…	268	267	266	265	264	263	262	261	260	259
アショーカ王即位後年次		(28)	…				1	2	3	4	5	6	7	8	9	
南伝・シャカ入滅後年次	(118)	119	…	…	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	
「後の118年間」以後の年次	(118)	1	…	…	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	

共通暦紀元前		258	257	256	255	254	253	252	251	250	249	248	247	246	245	244
アショーカ王即位後年次	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	
南伝・シャカ入滅後年次		229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243
「後の118年間」以後の年次		111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125

共通暦紀元前		243	242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	…	
アショーカ王即位後年次	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37			
南伝・シャカ入滅後年次		244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	…	…
「後の118年間」以後の年次		126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	…	…

表 14　第三結集開催期間と「後の 118 年間」年次

第三結集月次						一ヶ月目	二ヶ月目	三ヶ月目	四ヶ月目	五ヶ月目	六ヶ月目	七ヶ月目	八ヶ月目	九ヶ月目		
インド暦月次	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
南伝・シャカの入滅後月次	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	
南伝・シャカの入滅後年次	234年		235年												236年	
「後の118年間」年次	116年		117年												118年	